みんないっしょ

社会福祉法人誠心会
50周年記念誌

社会福祉法人誠心会設立50周年を迎え

社会福祉法人誠心会 理事長
濵田 徹

月日の経つのは早いもので、現在、誠心会の理事長を務めさせていただいていますが、私には大変多くの思い出が浮かんできます。1957年私が中学2年生が終わろうとしたころ、親友である西村昇君に紹介されたのが、誠心会創立者である浜田幸生先生でした。それからの私は幸生先生のなんともいえぬ人間性にひかれ、学校から帰ると毎日のように先生の家におしかけ社会奉仕の尊さを学び、やがて、奉仕団体「白樺会」が発足されました。白樺会には中学生、高校生、大学生が述べ数百人が参加し、当時の〔養護施設〕〔老人ホーム〕〔少年鑑別所〕〔教護院〕等を訪問したことが思い出されます。特に海老名にある養護施設〔中心学園〕を何回か訪問しているうちに子供たちを横須賀に招き、白樺会メンバーの各家庭でお世話をしようと決め実行しました。子ども達も白樺会メンバーも、初めての経験でしたが、心に残る素晴らしい行いだったと思います。

1970年4月社会福祉法人誠心会が認可され、しらかば保育園が設置されることになりました。設置場所は現在のしらかばこども園でしたが、工事が始まる時、浜田幸生先生と二人で見に行きました。その時、幸生先生がつぶやいた言葉が私には忘れることができません。その言葉とは、徹、俺は本当は無認可施設をやりたかった。しかし、今の俺には金がない。仕方がないから認可施設で始めるんだよ、という言葉でした。まさに、浜田幸生先生の人間性を表した言葉であると思います。また、しらかば保育園は健常児も障害児も受け入れ、誠心会の代名詞でもある「みんないっしょ」の言葉が誠心会の各施設にて受け継がれています。

2005年から、しらかば保育園の園長を引継ぎ、しらかば保育園池田分園、新大津分園を開設したり、いろいろと誠心会の発展の為に活躍されていた浜田和幸園長の依頼を受け、若杉昭平理事長の後を継ぎ、社会福祉法人誠心会の理事長に就任させていただきました。

2010年、横須賀市が児童養護施設、乳児院の設置を決め、経営希望の福祉法人を募集したので、誠心会も手を挙げたところ誠心会が選ばれました。

2011年4月開園に向けての準備中に思わぬ問題が発生しました。それは予定していた土地がキャンセルとなり、土地探しから始めなければならなくなりました。

しかし、運が良いことに私と同期で当時の横須賀市副市長の杉本俊一氏に相談したところ、現在のしらかば子どもの家の土地を紹介してくれました。その後はスムーズに準備が進み、2011年4月の開園に至りました。開園時の施設長には、浜田園長の推薦で、しらかば子どもの家は当時学校の教師を定年退職された青木利明先生が就任され、しらかばベビーホームには私、濵田徹が就任させていただき、同時に元横須賀副市長杉本俊一氏と親友、西村昇君が入職してくださり、開園間もない施設の問題解決に協力してくださり本当に助かりました。その後、3年が過ぎ、施設が落ち着いた頃、施設長を降ろさせていただきました。これからも、微力ながら誠心会発展の為に尽くさせていただきます。

50th anniversary

目 次

理事長ご挨拶 …… 1
目次 …… 2
祝辞 …… 4
役員ご挨拶 …… 14
後援会会長ご挨拶 …… 20

会の歩み

社会福祉法人誠心会について …… 22
社会福祉法人誠心会の施設 …… 23
みんないっしょの精神 …… 34
社会福祉法人誠心会のあゆみ …… 38
特別座談会 …… 54
誠心会の一年 …… 62
ZOOM UP！ …… 72
私と誠心会 …… 74

資料編

設立当時の資料 …… 90

現在の資料 …… 92

後援会 …… 96

メディア掲載 …… 98

あとがき …… 100

表紙のイラスト

表紙のイラストは、働く家しらかばの利用者である渡辺恵美さんが描いたカラフルなモチーフ画をベースにしており、創設者である浜田幸生が結成した白樺会の会報や新聞にデザインされた、白樺の木のフレームを施しました。
また、しらかば保育園では子どもたちが自然に囲まれた忍者屋敷(園舎)でユニークな遊びを行い、子どもたちとともに家族も職員も学びの毎日でした。
人に対する優しさや思いやりが自然に身につき、互いに助け合う姿、機敏さやバランス感覚、体力をつける姿から忍者をイメージし、今でも大切に引き継がれています。

50年の光陰矢の如し

社会福祉法人誠心会 理事

浜田 和幸

時の流れは本当に早いもので、社会福祉法人誠心会が神奈川県から認可されて、しらかば保育園の運営を開始した昭和45年4月1日から丸50年が経過しました。思えば私は横須賀市立大津小学校の5年3組に進級した時でした。

神奈川県職員であった父が、公務員を退職して事業を開始するということで、私なりに苦しい生活環境での暮らしには一抹の不安感で一杯でした。当時、私たち5人家族の住む家はなく、新設された保育園に整備された2階部分の10畳の職員宿舎と3畳間の住み込み保母の3室からのスタートでした。

私の部屋というより生活する場所は調理室の休憩室として整備された2畳間でした。トイレは職員、園児と共用でお風呂は家族5人と保母さん3人の共用でした。今でも鮮明に覚えているのは水道からは白い水と塩素の臭い、そして園児用トイレに唯一設置された当時としては最新だった手洗いの手を乾かす乾燥機が珍しくクラスの友達がそれを試しにたくさん訪れたことです。それと父の趣味でバー仕様にカラオケ機器が設置され、スナックのような6畳の職員休憩室がくだんの友人には物珍しく新鮮で人気でした。私はそれを自慢することなく、自分の部屋もない落ち着かない生活に大きな劣等感を抱えて生活していました。唯一私自身が今日に至るまでの50年に渡る生活に大いに生かされたことがあります。それは、毎日学校から帰ると園児や保母さんと一緒に汗をかくぐらい遊んで、夕方から夜にかけて父が調理室で保護者や保育園の協力者と毎晩のように繰り広げられた酒宴を目の当たりに見てきたことです。

後に中学、高校、運送会社のアルバイト、大学、県職員としての障害者施設での生活支援員、児童相談所の児童福祉司や県庁での事務仕事を行う上で、あらゆる階層の様々な人たちとの人間関係を円滑に構築出来る基礎を養えたことは最大の宝物であります。

平成15年3月に創設者の父が逝去されたことに伴い、私は父の元で頑張ってこられた髙谷茜洋舎施設長に促されて22年勤務した神奈川県庁を退職して、平成17年4月よりしらかば保育園園長に就任しました。定員60人の文字通りみんないっしょの「しらかば保育園」からスタートしました。この15年で待機児童対策、超少子高齢化、児童虐待の飛躍的な増加、男女平等参画等の社会的変容が顕著な中、私が生まれる前から父の元で青少年のボランティア団体「白樺会」のリーダーであった濵田徹氏に理事長をお願いして、髙谷施設長や多くの支援者・協力者の皆様の多大な後押しを頂き、こども園、分園2園、家庭的保育事業所、小規模保育事業所、3つの学童保育と乳児院・児童養護施設を新規開設して運営することになりました。

今後はこれらの施設を駆使して誠心会の150人にも及ぶすべての専門職種の職員と力を携えて社会のニーズに微力ながら応えるとともに後継者の育成に励むことを肝に銘じて地道な福祉実践を継続することが使命であると認識しております。引き続き多くの皆様のご支援とご協力をお願いいたします。

50th anniversary

「みんないっしょ」を紡いで

社会福祉法人誠心会 理事

髙谷 信好

「事前報告（起案を含めて）と協議決定事項を全職員に徹底
礼儀と笑顔　点検と確認　機敏な動作
『使命感と責任感をもち、対象者に対する献身と奉仕の精神を身につける』」

誠心会30年を迎えた2000年1月4日の法人仕事始において、創設者浜田幸生先生が職員に示されたその年の目標です。初心に戻る意図があったのかもしれません。10年、20年後を見据えた覚悟でもあったはずです。積み重ねた50年を振り返ります。

白樺会があり、しらかば保育園を設立し、働く家しらかば、月夜野に繋がります。

浜田幸生、はる子御夫妻の周りに、二代目理事長の若杉昭平さん、三代目理事長の濵田徹さんを始め、魅力的な人たちが犇（ひし）めいています。「みんないっしょ」の実践は人間存在の肯定である生き方だと証明してくれます。

冒頭の訓示は「職員よ大志を抱け」と鼓舞されているのです。自ら考え、発言し、行動する。その機会を与えようとされたのです。対象になる人も、職員も、周縁の人々も、互いに尊重し合える人間関係を作ろうとされた。人を大切にする。そういう志をもった人を育てていく、これが誠心会であると信じています。

こども、女性、障害がある人、生まれ育った場所で困難を伴う人、社会が歴史の中で理不尽に生み出した差別に抗う姿勢があります。「権力に阿（おもね）ることがあってはいけない」浜田幸生（誠心会）の至言です。

保育園、こども園、学童、乳児院、養護施設を巣立っていったこどもたち、福祉事業所での体験を未来の糧にしてくれた利用者の皆さん、そして生活を共にしてくれた職員、ボランティアの人々。「いつまでもいっしょにと思うけれど、そんなわけにはいかない」だから思い出があるのでしょう。

これからの50年を築いていくであろう職員のみなさんに、法人設立時の理事として永く御指導いただいた日本社会事業大学名誉教授である五味百合子先生の教えを伝えておきます。

「社会福祉に競争原理はそぐわない」
「人は人との関わりの中で育まれていく」
「常にヒューマニズムであらねばならない」

50th anniversary

地域と共に歩む

社会福祉法人誠心会 理事

仲嶋 久義

社会福祉法人誠心会設立50周年にあたりご挨拶申し上げます。

長年誠心会を見守り支えてくださった関係各位、利用者の皆様、誠心会の歩みと歴史のご苦労を共にされてきた職員、関係者の多くの方々に敬意と感謝を申し上げます。また、50年の節目の時に施設長の一人として立ち会えることを光栄に感じます。

私の誠心会での経歴はわずかですが、振り返りますと昭和57年に県の障害福祉課在職時に創設者であられる故浜田幸生理事長（当時）の存在、茜洋舎という独特の響きを持った施設を知った頃に遡ります。当時、障害福祉課の中でも在宅障がい児者の方々に向けた法外事業や県単事業等を担当する福祉班からすると新しい発想や取り組みを実践する誠心会の動きは注目に値する存在だったと思われます。

その頃の障害福祉分野では活気がある流れがありました。国際障害者年、障害者の長期計画などの取り組みがなされ、法整備や制度が整わない分野にも視点が当たり、制度が整備される期待が感じられる頃でした。世の景気に陰りが出ると一変する脆さもありつつ、新しい視点と取り組みが求められていた時代に合致していた一つが誠心会でした。

個人的にはたまたま職務での関わりという感覚でしたが、その後の児童相談所勤務で浜田和幸現こども園園長と通算3回同じ所属で勤務させていただいたのも何かの巡り合せを感じます。

誠心会がその時々の福祉の現状や地域の必要性に応じた役割を受け入れて、職員、関係者の多くの努力と工夫の中、実践してきた経過は大いに誇れる実績だと思います。中核市として最初に児童相談所設置市となった横須賀の地で設置された長瀬の2施設、保育園からこども園への移行、そして逗子の小規模保育事業などが同様に加わりました。職員はもとより組織も拡充しましたが、単純に拡充だけではない成熟の時期に既に入っております。

今後の運営、取り組みの多様性も広がる必然性がありますし、時代の変化に応じた地域の多様なニーズを意識した地元への貢献と着実な実績作りが求められていくものと思います。

これからも関係者の皆様そして地域の方々とともに歩む誠心会を支えていただきたいと思いますので、引き続きよろしくお願いいたします。

50th anniversary

誠心会50周年を受けて

社会福祉法人誠心会 理事

芝 太郎

みなさまのご支援とご指導のもと、誠心会は50周年を迎えることになりました。理事として心よりお礼を申し上げます。

とは言いましても、私が誠心会に入職しましたのは2011年、つい9年前のこと。50年という誠心会の長い歴史を共に歩んでこられた錚々(そうそう)たる方々と比してはるかに新参です。

ただ、新参者であるがゆえ、未だ強烈な記憶と感情を持って誠心会との関わりを振り返ることが出来る、ということは、私が務められる数少ない役割なのかもしれません。

2010年、次年度の入職が決まったその日、青色に白い犬の本を手にしました。帰りの電車で何気なく捲り始めたその本には、破天荒な、しかし強烈に人を惹きつける人物像が様々な人たちの言葉で語られており、「その人となりを一度、体験してみたい」というのが本を閉じた時の私の率直な感想で、そしてそれが叶わない事実に少し複雑な気持ちを抱いたことを覚えています。今、振り返ってみてもなぜか「もったいないことをした」という感情にとても似た気持ちが沸き、戸惑います。

その本で語られていた言葉、「みんないっしょ」が私は最初から好きでした。短く、率直で、「福祉」や「生き方」、「在り方」、様々な意味を包含した懐のある言葉だと今でも感じています。しかし、それゆえに新しい施設で働き始めた当時、みんなでの共有が難しく、共通理解をめぐり、方向が食い違うこともありました。

50周年を迎えるにあたって、この「みんないっしょ」を再考する会に交えていただけたことは「私自身がどうしてこの言葉を好きなのか」を自分の言葉で考えるありがたい機会となりました。この会で話し合い、基本理念に加えた基本方針には、誠心会の50年間の歩みを大切にした上で、新しい50年を歩み始めるための私たちの言葉を込めることが出来たと思っています。

今までと同じであたらしい、「みんないっしょ」に向けて職員一同で邁進していきます。どうか今後とも誠心会とこの新参者への温かいご指導と、ご支援をいただけましたら幸いです。

50th anniversary

春は必ず来る

社会福祉法人誠心会 理事

多田 純夫

誠心会の創立50周年、おめでとうございます。

思えば今から40年前、大学の先輩だった髙谷さんが「何やら居酒屋をやっている施設に就職するらしい」などという噂が飛び交い、いかにも毎年大学祭で「居酒屋たかや」を開店していた人らしい就職先と得心したものです。

卒後しばらくは疎遠でしたが、私が県横須賀児童相談所に勤めていた時、当時の淺井所長（現在、鎌倉清和会理事長）が県を退職するにあたって、茜洋舎の浜田幸生氏にご挨拶に出向いた際に同行しました。そこでのやりとりを聞いて、淺井所長にとっても幸生氏と誠心会は特別な存在だったことが感じられました。同児童相談所では浜田和幸氏とも一緒に働きました。当時は今のように虐待ケースが後を絶たないというようなことはありませんでしたが、和幸氏が担当した地域は触法、虞犯等の教護ケースの発生が多く、その対応には大変な時間と体力も費やし、苦慮していた姿が思い浮かびます。

その後、私も県を退職し民間障害施設に勤めることになり、髙谷さんと施設経営や人材、行政指導、各種規定・規則等で相談し合うことが増え、その縁もあったからでしょうか、平成24年から理事として誠心会に関わることとなりました。

いま、新型コロナウィルスの感染が世界中で猛威を振るっています。

緊急事態宣言が全国に拡大され、ほとんどの学校が休校し外出自粛やイベントの中止、集客施設の休業など、みんながじっと家で静かに生活する状況が続いています。私たちは不測の事態に陥ったとき、先人の教えと過去の経験に救いを求めます。しかし私も福祉現場等で40年を過ごしながら、このような事態は初めての経験です。阪神・淡路大震災や東日本大震災などの多くの災害を経験してきた国です。

春は必ず来ます。「50周年の年に大変なことがあったね。」と将来忘れられない思い出になることを、また誠心会と同会を利用するすべての人たちの幸せを願って。

しらかば保育園（現在：こども園）本園舎建て替え

社会福祉法人誠心会 監事

角田 正太郎

社会福祉法人誠心会創立50周年、誠におめでとうございます。

これは歴代の理事長始め役員、各施設長及び職員の皆様の御努力の賜物でございます。

私のしらかば保育園との出会いは、浜田園長から声をかけていただいたことに始まります。浜田園長と私は、県職員時代、県職員軟式野球クラブ対抗試合を行っておりました。

別々のチームに所属していましたが仲の良いチーム同士であり、また、高校の同窓生という縁でもあり、2012年4月から3年間誠心会本部事務局に勤務いたしました。

本園舎建て替え工事スケジュールは、2013年11月仮園舎建築着手。2014年3月仮園舎完成、引越し。2014年4月旧園舎解体、撤去、新園舎建築工事。2015年3月新園舎完成、引越し。

新園舎建設にあたり、職員の方と教室の配置など打合わせを重ねた中で、災害時の園児の避難経路について熱心に意見を出し合っていた様子が印象的でした。

旧園舎解体に伴い、玄関脇にありました長年旧園舎を見守り続けてきた大きな楠木は、現状のまま残して欲しいと多くの方の声がありましたが、工事に支障があるため伐採されることになり誠に残念なことでした。

仮園舎（本園舎から南西の北久里浜方面へ徒歩10分）へは、不安を抱えての引越しでした。仮園舎は限られたスペースでしたので職員の方は大変苦労されたことと思われます。また、駐車場も限られていたため当初、登園時の保護者の車両で混雑していましたが、その後、園児の祖父の方に円滑な交通整理をしていただき、大変感謝した次第です。

2015年3月7日新園舎落成式。3月14日新園舎へ新たな期待を胸に引越しを行いました。そして、3月28日新園舎で初めての卒園式が行われました。

誠心会　創設50周年に寄せて

株式会社三春商会 代表取締役会長
社会福祉法人誠心会 しらかば子どもの家・しらかばベビーホーム
後援会 会長

益子 健一

この度、社会福祉法人誠心会が法人設立50周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

貴法人が設立された昭和45（1970）年は、大阪で万博が華やかに開催された年です。まさに、我が国が高度経済成長を謳歌する一方で、社会インフラの整備は遅れ、そのしわ寄せが子供や弱者に来ていた時代です。

このような中、浜田幸生・はる子夫妻は、しらかば保育園（現しらかばこども園）の設立を手掛けられました。その後、生活介護事業所としての茜洋舎のほか、濵田現理事長の手により児童養護施設しらかば子どもの家・乳児院しらかばベビーホームが開設されるなど、（社福）誠心会は多岐にわたって社会福祉事業の運営に取り組んでこられました。

この50年の歩みは、誠心会創設者である浜田幸生氏の「みんないっしょ」の理念を共有し勤しんでこられた歴代理事長はじめ、役職員の方々や関係する皆さまの並々ならぬご尽力の賜物と深く敬意と感謝を申し上げます。

私はご縁を頂いて、10年前に新設されたしらかば子どもの家・しらかばベビーホームの後援会活動に、ささやかですが取り組んでいる一人です。

この後援会は、しらかば子どもの家・しらかばベビーホームに在籍する園児たち（最近は卒園者も）が、健やかに自立した人生を送れるように支援を行っており、現在、この活動に賛同を頂いている会員は法人・団体で約60社（団体）、個人で約100名に及び、支援の輪が年々広まっていることは大いに勇気づけられるところです。

最後に、これからも社会福祉法人誠心会の諸施設が地域に溶け込み、物心ともに益々充実・発展し、また在籍する方々にとってもかけがえのない施設としてあり続けますよう心からご祈念申し上げ、お祝いのことばといたします。

50th anniversary

社会福祉法人誠心会
50周年記念誌

会の歩み

社会福祉法人誠心会について

基本理念

みんないっしょ

基本方針

ひとりひとりの特性を大切に守る

人にはひとりひとりの特性があり、その特性が守られ、受け入れられる環境で、集団の中にいても、みんなが同じように自分らしさを発揮できることを目指します。

人の命の尊さを学び、心とからだの全面的な発達を保障する

障害を持つ人も、持たない人も、どんな年齢でも人はいつまでも発達するという「生涯発達」の考えのもと、利用する人たちのどんな小さな成長もどんな些細な発達も見逃さず、成長発達できたその喜びを共に分かち合います。

優しさや思いやりの心を育めるように、職員自ら実践する

優しさや思いやりの大切さは、言葉や支援で伝えることも大事ですが、何より私たち職員が同僚を信頼し、意見の違いがある中で、お互いを否定せず思いやり合って働いている、その姿を見てもらうことで、強く伝えられると思っています。

法人に勤める職員ひとりひとりもかけがえなく尊重される

利用する人のひとりひとりが大切にされるように、職員ひとりひとりもこの法人で働く者としてかけがえなく大切にされます。自らが大切にされた経験はまた利用する人たちを大切にできることにつながっていると信じています。

みんなとお互い様の和をつくる

子どもから高齢者まであらゆる年代、また障害のある人もない人も、地域で暮らす誰もが誰かを支え、誰かに支えられる関係、すなわち「お互い様の関係」が和となって、つながっていく。そんな社会を作っていきます。

社会福祉法人誠心会の施設

しらかばこども園

施設概要

幼保連携型認定こども園とは

教育・保育を一体的に行う施設で、いわば幼稚園と保育所の両方の良さを併せ持っている施設です。主に下記のふたつの役割があります。

・保護者の就労に関わらず、小学校入学前の子どもに幼児教育・保育を提供する機能
・地域の子育て支援を行う機能

保護者が働いている家庭でも働いていない家庭でも、3～5歳児は同じクラスで同じ教育や保育を受けることができます。

認定こども園とは

「就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律」通称「認定こども園法」に基づき運営されます。

幼児期の教育・保育は、子どもの生涯の人格形成の基礎となります。また、少子化や社会環境の変化により保育のニーズが多様化しています。認定こども園法は、子どもの教育・保育と保護者に対する子育て支援を行う場を提供し、子どもが健やかに育つ地域環境を整えることを目的としています。

認可定員（2021年4月1日現在）

- **池田分園　20名**
  - 0歳児（なめこクラス）……8名
  - 1歳児（らっきょうクラス）……12名
- **新大津分園　20名**
  - 0歳児（なめこクラス）……9名
  - 1歳児（らっきょうクラス）……11名
- **本園　118名（1号12名含）**
  - 2歳児（くすクラス）……25名
  - 3歳児（うめぼしクラス）……31名（1号 4名含）
  - 4歳児（むぎめしクラス）……31名（1号 4名含）
  - 5歳児（オキアミクラス）……31名（1号 4名含）

職員数

園長　……常勤1名
副園長　……常勤1名
主幹保育教諭　……常勤2名
指導保育教諭　……常勤2名
保育教諭　……常勤19名、非常勤19名
栄養士　……常勤1名
調理師　……常勤2名、非常勤2名
調理補助員　……非常勤3名
事務員　……常勤3名
嘱託学校医　……常勤1名
嘱託学校歯科医　…常勤1名
嘱託薬剤師　……常勤1名

施設情報

〒239-0806
横須賀市池田町1-22-12
TEL:046-834-0690　FAX:046-834-1706

2012年4月には、0～1歳児を預かる「しらかばこども園 新大津分園」を開設。新大津駅から近く、送り迎えに便利です。分園から少し離れた場所には農園もあります。

2019年7月には、根岸町の住宅街の一角に、生物が自然な状態で生息できる空間「ぼくらの里山 しらかばビオトープ」を設置。園児や運営する学童クラブの児童の観察や遊びの場として活用しています。

横須賀中央ライオンズクラブと連携し、特別養護老人ホームへの慰問活動を行うなど、園外の活動も活発です。

しらかばこども園学童クラブ

施設概要

学童クラブとは

正式には、「放課後児童健全育成事業」と言います。児童福祉法第6条の3第2項の規定に基づき、保護者が労働等により昼間家庭にいない小学校の子どもたち（放課後児童）に対し、授業の終了後に児童館等を利用して適切な遊び及び生活の場を提供して、その健全な育成を図ります。

学童クラブは、小学生が放課後に安心して過ごせる場です。両親共働き家庭やひとり親家庭など、働きながら子育てをしている家庭では、放課後や学校の長期休みに、子どもだけで過ごすようになりがちです。「保護者は安心して働くことができ、子どもたちは安全で充実した生活を送ることができるように」との願いで運営しています。

第一学童クラブ

しらかばこども園本園内2Ｆにて学童保育を行っています。毎日第二学童クラブと連携しながら、しらかばこども園のグラウンドでドッヂボールをしたり、室内でコマや LaQ 等、一人ひとりが思い思いに楽しく遊んでいます。しらかばこども園の園児たちのお手伝いをしてくれる子もいます。

大津小学校の子どもたちが通ってきています。

第二学童クラブ

しらかばこども園に隣接する建物にて学童保育を行っています。毎日第一学童クラブと連携しながら、子どもたちが「自分の素」を出せるように、のびのびとした雰囲気を大切にしています。

主に根岸小学校の子どもたちが通ってきています。

第三学童クラブ

2020年に新設し、旧第三学童クラブ、第四学童クラブが合併し、学童保育を行っています。手探りの状態ではありますが、新しい学童のスタイルを提案し、挑戦していく学童クラブを目指しています。

大津小学校、根岸小学校の子どもたちが通ってきています。

認可定員

第一学童クラブ…26名
第二学童クラブ…30名
第三学童クラブ…36名

職員数

学童指導員　……常勤3名、非常勤6名
学童支援員　……非常勤5名
学生アルバイト　……数名

施設情報

しらかばこども園第一学童クラブ
〒239-0806
横須賀市池田町1-22-12
TEL:080-7546-0851

しらかばこども園第二学童クラブ
〒239-0806
横須賀市池田町1-22-15
TEL:080-7951-0634

しらかばこども園第三学童クラブ
〒239-0806
横須賀市池田町1-18-4
TEL:080-4058-8414

しらかば家庭的保育事業所

施設概要

家庭的保育事業所とは

児童福祉法第6条の3第2項の規定には、「子ども・子育て支援法第十九条第一項第二号の内閣府令で定める事由により家庭において必要な保育を受けることが困難である乳児又は幼児であつて満三歳未満のものについて、家庭的保育者の居宅その他の場所において、家庭的保育者による保育を行う事業」と定義されています。

3歳未満児における待機児童対策と、家庭的でより温かく子どもや保護者に寄り添った保育の提供をめざして、家庭的保育事業を行っています。しらかばこども園本園の隣接地に一般家庭と同じ一軒家を利用しています。

3歳児クラスへの進級の際は、希望すれば必ずしらかばこども園に転園できることになっています。

認可定員（2021年4月1日現在）

0歳…1名
1歳…2名
2歳…2名

職員数

家庭的保育支援員（保育教諭）　……常勤１名
家庭的保育支援員（保育教諭）　……非常勤１名

施設情報

〒239-0806
横須賀市池田町1-22-20
TEL:046-836-8668

茜洋舎
働く家しらかば

施設概要と基本方針

施設概要

「茜洋舎」と「働く家しらかば」では障害福祉サービス生活介護事業を行っています。

身体、知的、精神などに障害のある人たちが、障害の種別に関わりなく日中施設を利用しています。

利用定員

40名

基本方針

法人の理念の下、障害の種別に関わりなく利用者ひとりひとりの希望に沿った支援計画に従い、他の個人、団体、機関と連帯感を保ちながら、以下の項目ごとに支援を行い、利用者の施設利用の促進と社会参加を目指します。また、職員の労働環境（所得、休暇、休憩時間、資質向上、家族）をより満足なものにし、職員の働く意欲を利用者への支援充実に結びつけていきます。

（1）日常生活の支援と生活関連動作の維持向上
（2）創作的活動及び生産的活動の機会の提供
（3）就労を含め社会的活動の相談援助

利用日時

- 利用日…… 月曜日～金曜日
- 利用時間… 午前8:45～午後3:30
- 休日…… 土曜・日曜・祝日
  ※その他、事業計画で定める冬期休暇及び臨時的な短縮日

施設情報

茜洋舎
〒239-0831
横須賀市久里浜6-1
TEL/FAX:046-834-0957

働く家しらかば
〒238-0031
横須賀市衣笠栄町1-27-3
TEL/FAX:046-852-0130

主な生産的活動

【自主製品】漬物

自慢の漬物は守り続けてきた伝統の味

「茜洋舎」では販売用の自主製品として開設当時から梅干し・らっきょうなどの漬物を手作りしています。
作るだけではなく、材料を仕入れるところから、製品としてできたものを納品に行くのも全て利用者と職員で一緒に行います。

● **らっきょう**

甘酢、醤油、塩の３種類。

● **梅干し**

白梅干し(塩)と赤梅干し(しそ入り)の２種類
こだわりの国産・無添加！
南高梅を使っています。塩分18%、昔ながらのすっぱ～い梅干しだから日持ちします。
作り方は昔から変わらず、すべて手作業！

● **白菜漬け**

冬場は白菜漬けを作ります。(11月～)
注文を受けて配達させていただきます。
毎年すぐ売り切れてしまいます！

その他の自主製品 布製品、フラワーアレンジメントなど

受託加工 業者からの下請け作業

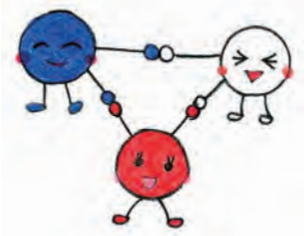
郵便事業 郵便局の委託業務として切手・はがき・収入印紙などの販売・配達

外部販売 漬物、駄菓子、自主製品の定期販売、地域、施設等バザー出店/出張販売/委託販売

創作的活動・余暇活動

様々な体験を行うことで社会参加を支援します。

- ボッチャ
- 各クラブ活動(運動・書道・アート・ボイストレーニング等)
- 法人内施設との交流（みんないっしょ）
- 外出レクリエーション



茜洋舎

茜洋舎前での製品販売所 店番中です

神明公園での生協祭に出店（木樽から直接白菜漬販売）

フリーマーケットに駄菓子移動販売車出動

なめこ栽培中（製品にして販売していました）

働く家しらかば

手作り食品の軽トラ巡回販売

一周年記念セール

ディズニーランドに日帰り旅行

浅草・浅草寺を散策

しらかばベビーホーム

施設概要

乳児院

児童福祉法第37条に基づき、さまざまな事情により家庭で育てることが困難な原則2歳未満の乳幼児をお預かりして養育することを目的とした児童福祉施設

歴史や目標

開 設　2011年4月（定員19名）

目 標

1.挨拶を励行して、個人の尊厳をお互いに尊重します。

2.いつも笑顔で相手を思いやると共に常に優しい気持ちを持つ努力をします。

3.何事にも常に一生懸命取り組みます。

施設機能

- 保護者の病気・入院・離婚・別居・家出・死亡等のため家庭で養育できない場合
- その他、虐待等で養育に欠ける場合

ショートステイ

- 保護者が出産・傷病・病気看護等、緊急の事情がある場合

施設情報

〒239-0826
横須賀市長瀬3-3-1
TEL:046-874-5900 FAX:046-874-5902

しらかば子どもの家

施設概要

しらかば子どもの家って？

「児童養護施設」とは、児童福祉法に定める児童福祉施設の一つです。

児童福祉法第41条には、「児童養護施設は、保護者のない児童、虐待されている児童など、環境上養護を要する児童を入所させて、これを養護し、あわせて退所した者に対する相談その他の自立のための援助を行うことを目的とする施設」と定義されています。

定員

幼児から高校生までの男児20名、女児20名。計40名が生活しています。

他に、地域の家庭の保護者が出産や病気入院の際にお子さんを一時的に泊りでお預りすることがあります。

（ショートステイ定員２名）

施設機能

入所しているほとんどの子どもが被虐待を経験しています。この頃は集団生活が苦手で、刺激に反応しやすい子どもがとても増えているのが現状で、特別支援学級に通っている子どもも多くなってきています。

このような事から心理的なケアもとても大事になってきているため、養護施設には心理士が配置され、保育士、児童指導員、看護師と共に大きな役割を担っています。必要に応じて、定期的に心理面接やプレイセラピーを行ったり、児童相談所への心理通所も実施しています。

学校の教材費、交通費、定期代、一人ずつの個人費等、事務員が最終的に管理をしています。

また、食べ盛りの子どもに少しでも美味しい家庭の味を食べさせたいと、栄養士、調理員も工夫をしています。

子どもたちが安心できて、安全で安定した生活が過ごせるように取り組んでいます。

施設情報

〒239-0826
横須賀市長瀬3-3-1
TEL:046-874-5901　FAX:046-874-5902

しらかば逗子乳児保育園

施設概要

小規模保育事業所A型とは

小規模保育所A型の基準は以下としています。
・職員数：保育所の配置基準＋1人
・職員資格：保育士（全員）
・定員：6人以上19人以下
・保育室の面積
　0歳・1歳…1人当たり3.30㎡
　2歳児……1人当たり1.98㎡

　A型は、保育所分園やミニ保育所に近い形態です。職員の配置基準は、全員が保育士資格を有し、従来の保育所よりも保育士を1名多く配置するよう定められています。

利用上の手続き

　保育を希望する3歳未満児（3号認定に該当）は、逗子市に保育の必要性の認定の申請及び利用希望施設の申し込みを行います。その後、「市が利用調整」を行ったうえで、利用する園と契約します。（逗子市に入所児童の決定権がある）

認可定員（2021年4月1日現在）

0～2歳児…19名

職員数

園長　……常勤1名
主任保育士　……常勤1名
保育士　……常勤4名、非常勤3名
保育士助手　……非常勤1名
調理師　……非常勤1名
調理員　……非常勤3名

施設情報

〒249-0003
逗子市池子2-3-42
TEL：046-854-9570　TEL：046-854-9571

episode
-エピソード-

議論を繰り返し得た 達成感と絆、友との出会い

元白樺会メンバー　濵田 徹　西村 昇

—お二人が白樺会に入会した経緯を教えてください

濵田（写真左）：中学生のときに、私と西村、そして二人の共通の友人であった蒔田の3名で白樺会に入りました。きっかけは私たちより1学年上で横須賀市立第一高等学校に通う先輩からの紹介でした。詳しい内容は分からず、「先輩に誘われたから」という軽い気持ちで、当時白樺会の活動拠点となっていた浜田幸生先生（以下、幸生先生）のアパートを訪れました。

—福祉やボランティア活動に興味はありましたか

西村（写真右）：ぼくら3人とも特別興味があったわけではありません。女子高に通う先輩に誘われて、楽しそうだから行ってみようと思っただけです。しかも、声をかけていただいたときは、まだ会ができて間もなくて、具体的な活動内容も決まっていませんでした。もともと、白樺会ができたのは、当時幸生先生が勤務していた市内の児童相談所に第一高校の生徒が見学に来たことがきっかけだったと聞いています。

—実際に参加されてみてどうでしたか

西村：面白かったですよ。当時メンバーは10名ほどだったのですが、皆が関心があることを自由に話して、議論をするのが新鮮でした。基本的に幸生先生は僕ら学生の議論に口は挟まず、静かに見守ってくれました。議論が行き詰まったり、話し合いが落ち着いたときに、アドバイスをくれました。話し合いのテーマは自由で、その時々で皆が関心をもったことが議題になりました。会として何を行うのかについては、幸生先生が「福祉」の現場で働いていましたので、自然と「福祉」関連の活動をしようという流れになりました。

濵田：具体的な活動としては、県内の当時でいう養老院や養護施設などをまわってボランティア活動を行うものでした。その際、ただお手伝いをするのではなくて、「何か我々で身につけたことを発表したい」ということになり、演劇、指人形劇、影絵などを練習し、ボランティアで訪れた各場所で発表してまわりました。いざ活動を行う段になったときには、あっという間に会のメンバーも増え、一番多いときで100名くらいだったと記憶しています。幸生先生は「得意なことをやりなさい」と指導していましたので、訪問先で演劇を行うチーム、指人形劇を行うチームなど、自由に選べました。僕は指人形が得意でしたね（笑）。

—特に思い出に残っている訪問先はありますか

濵田：海老名市の中心学園（児童養護施設）の子どもたちを横須賀市内の白樺会のメンバーの家に招くホームステイを行ったことがありました。当時ご両親がいない子どもも多くおりましたので、『家庭の温もりを感じていただける機会にしたい』と考えました。子どもたちにはすごく喜んでいただきました。

西村：二宮の少年院に歩いて行こうとしたこともありましたね。みんな学生で元気でしたので、1日歩けば着くだろうと思ったんですね（笑）。結局、車で乗せて行ってもらいましたが、パワフルに活動していました。

—今振り返ってみて、白樺会に入って良かったことは何でしょうか

濵田：友だちがたくさんできたことですね。半世紀以上経った今でも手紙のやりとりをしている方もいますよ。

西村：演劇など繰り返し練習し、発表したときは大きな達成感がありました。幸生先生のもと、政治や思想を抜きに仲間とたくさんの議論ができたことが楽しかったですね。

episode -エピソード-

社会福祉法人誠心会の設立趣意を振り返る
―軽度心身障害児と普通児との統合保育を目指して―

社会福祉法人誠心会 評議員　若杉 昭平

社会福祉法人誠心会の設立は、ひとえには、浜田幸生という人が、生涯をかけて取り組んだ人間に対する深い思いやりを、福祉制度のうえで形に表した一つの到達点だと、最近になっても、その思いは変わらずに私の心の中に存在します。加えて、この人が持っていた独特な気質、例えば、人と人とのつながりやその和をつねに大切にすることなど、人間の心の深奥へと発信する行動が、多くの人たちの共感を得てきたのだと、福祉とは制度ではない、真からの心情の表れだということとともに忘れることはありません。

特に、この法人の設立趣意が、軽度の心身障害児と普通児の統合保育の実現にあったのですから、当時の法律では、軽度障害児と普通児の統合保育を大きな旗印としての施設は、当然、認可されなかったわけです。それではと、無認可の私的な施設を自力で開設することまで考え、軽度心身障害児の「入園のしおり」まで印刷してしまったのです。子どもたちの現実が、制度改正まで待つに忍びないという気持ちが、限度いっぱいにあったのでしょう。

しかしながら、土地の取得から園舎の建築まで、また職員の給与をはじめ、子どもたちの日常の経費を考えたら、無資力な一個人の力では、どのようにしてもその方策は経たないのが現実でした。先生の恩師や福祉の先達からは、やはり無理の無い公的な運営を基盤にして開設すべきとの声に頷かざるを得ず、社会福祉法人の設立を厚生省（現厚生労働省）あてに認可申請したのでした。

もちろん、認可申請書には、この保育所の設置経営の目的条件として、この保育所が普通児とあわせて軽度心身障害児の保育に取り組むことを、しっかりと示したのでした。

法人名は、福祉とは「制度」ではなく、「恵み・真心」の意味であるという思いから、「誠心会」と名づけられました。

施設名は、昭和32年以来、先生が横須賀児童相談所に勤務する傍ら、十数年の間、育成指導してきた地域の青少年社会奉仕サークルの名称「白樺会」によりました。施設の開設に至るまでの根底には、このサークルの地道な活動が先生の気持ちを確かなものにしたことが考えられるのです。

昭和45年3月31日　社会福祉法人誠心会認可
同　　4月 1日　しらかば保育園開園

附言するならば、この若者たちの自主的な児童福祉施設など社会奉仕グループの地道な活動がなければ、就学前心身障害児の施設の開園は無かったということが言えるのです。先生は、こういわれました。「みんなで多くの児童養護施設等への訪問奉仕を重ねたが、一つだけ忘れられている子どもたちの施設があったと思う、それは、就学前の心身に障害をもった子供たちのことだ、是非、この子どもたちの施設を作りたい、それも、出来れば普通児もいっしょに保育できる施設がいい」と、その気持ちを常々その決意を語っていたのである。

私が、この青少年のサークル「白樺会」に参加したのは、大学生時代のことです。初めは、人形劇の指導ということで仲間になりましたが、サークルは、先生の指導理念にそって、自主的に動いておりました。このサークル活動も十年余を経て、当時中学生、高校生であった会員も成人して社会人となりました。児童養護施設や幼児教育・学校、その他福祉施設への進学や就職も目立ちました。これらの人たちの、新たな施設経営への応援も積極的でした。私自身は、結果として、勤務の余暇をすべて、新たな事業への開設準備の事務処理の作業に費やされました。

この軽度障害児と普通児の統合保育する「しらかば保育園」の開設は、幼児教育の世界に投じた一石になりました。その反響は、大きな輪を広げていきました。マスコミが集まり、行政機関も関心を動かしました。最も大きな喜びを持って迎えたのは、その親たちです。開園当初は、18名の入園児でしたが、あっという間に60名の定員は、満ち溢れました。入園希望者は、横須賀市内に限りません。当時は、保育児の入所は、市が措置いたしましたから、市外の希望者は、当該地域に一家で引越しをしてきたという方も目立ちました。遠く県外をはじめ、国外のカナダからも問い合わせがありました。入園の幸運は、受付の順番との風聞を信じ、早朝3時に門前に並んだという話も、今は思い出話の一つに残ります。

さて、これらのことを自分自身のこととして過ぎ去った月日を辿りますと、それが自分の余暇を利用したボランティア活動であったとしても、まさに人生の大半をそのことに引きずられて過ごしてしまったという感慨が、とても深いのです。このことは単なる余暇利用のボランティア活動であったのだろうか。ふと、思い返すときがあります。

ある日のことです。保育園が開園して数年の後であったと思います。幸生先生からこういわれました。

「今度、神奈川県で全国母親大会が開催される。その保育部会に出てもらえないか。そして、軽度心身障害児と普通児の統合保育の現状を話してきて欲しい」

「私は一介のボランティアですよ」

「そう、でも、この実情を話せるのは、君しかいない」

結局は、全国大会の会場である県央の厚木市の小学校へ出かけました。

いくつかの統合保育の事例ケースを借りて出席しましたが、それは心細い限りでした。保育部会の会場は、小学校の一教室でした。そこは、お母さん、保育士（当時保母）さんで一杯に溢れていました。男性は私一人黒一点でした。

「この部会に男性がおられるなんて珍しいですよ」

それだけで、みんなの注目が集まりました。

私は教室の一番後ろの隅に居りましたが、発表者は前にということで、前の席に出されました。これまでにない身の細る思いをしたのです。読売教育賞をいただく前のことでしたが、このユニークな保育活動のことは、出席者の多くの方々の関心の的でした。私の二十分の説明時間を待てずに、他の発表を除くようにして、質問は私に集中いたしました。

「みんないっしょの保育って、どんな保育ですか」

「就学前心身障害児の入所は、例えば、どのような障害でも入所できるのですか」

「行政の特別な援助があるのですか」

「ケース専門職員の配置はありますか」

質問を数えたら、切りがありません。手探りの保育、差別をしない保育など、何かそれらしいようなことを話した記憶がありますが、まだ若造であった私には、ただ熱気の中に立っているのが精一杯の思いでした。帰ってから、その様子をつぶさに報告しました。

「君には、無理だったかな」

「当然ですよ。涙が出そうでしたよ」

この大会での話は、当時の母親新聞で全国に広がりました。県外研修で他県からの見学する方々が増えましたが、この保育所の実践期間では、まだまだその入口でした。軽度障害児と普通児の統合保育の結論は先の話で、地域における手探りの保育は、当時の世相の渦に巻き込まれて、その実態を高めるまでには行っておりませんでした。その後のことは、誠心会の50年を振り返る皆さんの活動の生き生きとした内容に、そして地道な歩のなかで語られることでしょう。

episode
-エピソード-

静かに笑いあえる日

茜洋舎施設長　髙谷 信好

障害福祉の大きな分岐点となった2003年4月を迎える一ヵ月前に、誠心会創設者の浜田幸生先生は逝かれました。社会福祉基礎構造改革により、利用者本位の福祉サービス提供の実現という観点から、措置から契約へと福祉サービス提供方式の転換が図られた時です。障害をもつ人の自己決定の尊重、事業者との対等な関係、障害をもつ人自らによるサービス選択、契約によるサービス利用といった支援費制度の導入です。わずか三年で「障害者自立支援法」に変身してしまうわけですが。

「みんないっしょの保育とは、心とからだに障害をもった乳・幼児と就学猶予の児童を幼稚園と保育所が区別しないで地域の居住地において必要（原則的）に応じ集団保育の場を保障して、発達の遅れを取り除いてあげることを指します」と浜田先生は解説されています。国際障害者年の理念である完全参加と平等を先取りするかのように、1970年にしらかば保育園（統合保育）、1977年には働く家しらかば（障害者地域作業所）を開設し、障害に重きを置いた独自の福祉を展開してきました。

日本で障害をもつ人や関わりのある人たちが、堂々と社会に繰り出し働くことをテーマにしていく中、神奈川県では「ともしび運動」が盛んになっていきます。障害をもつ人も、高齢者も、外国の人もみんなが住みよい町にしていこうと、当時の長洲知事が提唱されました。

その一環が、働く家しらかばのような地域の中の作業所制度でした。地域福祉の礎になったわけです。さらに1982年、身体障害者通所授産施設として茜洋舎がスタートします。身体に障害をもつ人が通所する試みは、辛いことの連続でしたが、収容という言葉がまかり通っていた時代にはそれを打破するため必要な施策だったと思います。さらに1985年、障害をもつ人が店員の販売店「働く家あかね」（障害者地域作業所）をオープンすることになります（2007年に茜洋舎と統合）。障害をもつ人が自宅から町の作業所に通うことを「働く」と捉え、通ってくる人が集う場所を「働く家」と命名しました。「茜」は海に沈んでいく夕陽のこと、夕陽は必ず朝日となって昇ってきます。そこに障害をもつ人の未来を託したのです。

三つの施設に共通しているところがあります。しらかば保育園を卒園したこどもたちが養護学校等を卒業して社会人として利用しているところです。

障害をもつ人たちが家族以外の多くの人たちと関わりをもち、さまざまな体験を得られる、私たちの役割はその機会を提供するところから始まります。

しらかば保育園の児童福祉と共に障害福祉にも着目した誠心会の試みは、1970年から50年受け継がれてきました。

51年、52年、53年、絶えることはありません。

episode
-エピソード-

地域のニーズに応え続けるために

しらかばこども園
園長
浜田 和幸

父である前理事長が亡くなった2年後、「しらかば保育園」の園長に就任しました。

それまで神奈川県に勤めていたこともあり、今後児童福祉を取り巻く世界は激動の時代を迎えると感じていました。予想通り、この15年は、待機児童対策や2015年からスタートした「子ども・子育て支援新制度」、2019年10月の「幼児教育保育の無償化」など、国の制度設計をみても、大変革の時代となりました。このような荒波を越えていくためには、相当の覚悟が必要との思いから、一族経営ではない運営の形を求め、是々非々で臨む体制を整えたことも、法人にとって大きなターニングポイントになったと思います。

園長になってまず取り組んだのは、「職員の定着」と「待機児童解消」でした。当時職員は十数名でしたが高まる保育ニーズに応えていくためには、職員に働き続けたいと思えるような職場環境を提供することが急務だと考えました。保育士たちも結婚・出産で退職という状況がまだまだ当たり前の時代でしたから、自身の子育てが落ち着いたら戻ってきたいと思える職場を作るため、知恵を凝らす日々が続きました。保育士の処遇改善は国も積極的に取り組む問題であり、多くの職員を預かる身として、これからも取り組んでいく必要があると感じています。

待機児童についても、当時の定員は60名程度でしたから、全然足りません。児童相談所勤務時代に培った信念として、「そこに福祉ニーズがあれば断る選択肢はない」という気持ちがありましたので、すぐさま、分園を作るために奔走したことを覚えています。分園を作るにあたっては、県の職員、特に高齢者施設課などで働いた経験が役に立ちました。福祉を取り巻く様々な制度設計を実践していたため、迷わず待機児童対策のための分園設置に着手できたのも大きかったと思います。ほどなくして30人以下の受け入れでも認可を可能にする分園の設置促進の方針が発表され、それにいち早く手をあげることができました。

園長就任から約1年ほどの準備期間を経て、2007年10月には「しらかば保育園池田分園」が開所。2012年には「新大津分園」が開所しました。保育園で事務を担っていた妻は当初反対をしていましたし、周りからも施設・業務の拡大には心配の声が聞こえました。しかし、国は間違いなく待機児童・少子化対策・職員待遇改善などに本腰を入れると確信していたため、判断は揺らぐことはありませんでした。

激動ともいわれる時代の中で、常に正しい選択を続けることはとても難しいことでありますが、目まぐるしく変化する制度や地域の福祉ニーズをうまく読み取り、その時々で最善と思われる選択をしていくことがこれからの時代には重要です。幼保連携型認定こども園として横須賀市で最初に手を上げたことをはじめ、地域型保育や学童保育の運営等、常に地域に求められるサービスを提供できる法人として、職員一同、これからも力を合わせていけたらと思います。

特別座談会

「創設者の思いとこれからの誠心会」

社会福祉法人誠心会の設立50周年を記念して、創設者である故・浜田幸生と縁が深い5名が草創期のエピソード、さらには今後の誠心会を担う現役職員に伝えたい思いなどを語りました（聞き手・（株）タウンニュース社）。

―皆さまはどなたも創設者である浜田幸生先生と縁の深い方ばかりですが、はじめて幸生先生と出会ったのはどちらで、どのような印象を持たれましたか

西村：中学生のときに横須賀児童相談所で生徒が集まったサークル（今でいうボランティア団体）の話を聞きました。そこで、僕と濵田徹理事長、もう一人の友人と3人で、サークルの指導者だった幸生先生のところに行ったのが初めての出会いです。

―第一印象はいかがでしたか

西村：当時、幸生先生は県の職員で児童相談所に勤めており、相談所裏手の借家で生活していました。お家に会いに行くと、市立第一女子高校（現・市立横須賀総合高校）の生徒を中心にしたメンバーがおり、様々な事を議論していました。でも、先生は指導者なのに、命令したり、威張るそぶりが全く無く、みんなの議論をただ聞いているだけなのです。でもこちらから聞くと、しっかりとした回答が返ってくる。会話のキャッチボールがすごくできる方で、面白い人だと思いましたよ。

濵田：私と西村は、誠心会の前身であり、幸生先生が結成した青少年ボランティアグループ「白樺会」の活動に中学2年から高校を卒業するまで参加しました。西村が言うように、自分から生徒に命令する人では無かったです。養護施設への訪問など真面目な話から、くだらない話まで、一生懸命聞いてくれて、我々生徒と一緒になって動いてくれる姿を魅力に感じました。

―小林さんも幸生先生とは、白樺会で出会ったのが最初ですか

小林：はい、私は女子高に通う高校時代に仲間

若杉 昭平

3人で白樺会に入りました。三春町の先生のお家に行きましたら、先生がいないのにメンバーの生徒が勝手にご飯を炊いて食べている姿を目撃して、面白い所に来たなと思いました。実は先生から一度も怒られたことがないんです。自主性を重んじられていたのかもしれませんね。それと、先生はすごく綺麗好きでしたよ。先生がご結婚され、そちらにいらっしゃる浜田和幸くんが生まれたときは、ベットが無いので机の上に寝かしてあやしていました。先生はだれにも触らせないんです。抱っこさせてもらえなかったですもの。

―浜田園長は今のエピソードについていかがですか

浜田：父が綺麗好きだったという話は聞いたことがあります。煮沸して哺乳瓶をきれいにしてからじゃないと、ミルクを混ぜなかったとか。理事長にしても西村さんにしても、私が物心ついた時から、そばにいらっしゃいましたね。兄弟というとおこがましいですが、理事長のお母様にも、本当に可愛がっていただきました。洋ちゃん（小林さん）も保育園ができたときから働いていただいていましたので、ずっと一緒でしたね。

―若杉さんと幸生先生の出会いはいつですか

若杉：大学時代に遡ります。当時私は大学の演劇クラブの裏方の手伝いをしておりました。横須賀の地元地域では、アルバイトである町内の子どもたちの夏休みの宿題の面倒をみたりしておりました。その最終日に何か行事をという子どもたちの希望で人形劇を行いました。親御さんたちも来られて、好評でした。それで、卒業後も友人たちと人形劇を続けたのです。その噂が白樺会にも伝わったのでしょう。会長さんが人形劇の製作場（大津幼稚園）へ来られて、私たちのサークルも人形劇を取り入れたい、ついては指導してほしい、との話がありました。そのようなことで、その日にサークルの指導をされていた三春町の浜田幸生先生の下宿先に行ったのが、最初の出会いでした。挨拶をしますと、湯飲みにお酒を注がれ、「まあ飲んでから」といわれたのが、印象に残っております。

―豪快な方だったのですね

若杉：幸生さんは楽しい人でしたが、反面厳しいところもありました。白樺会で児童養護施設等に訪問に行く際も、「若者は元気がいいけれど、ふざけ過ぎるところもある。施設で失礼があったらいけないので、正しいことは正しいと、きちんと君が教えてほしい」という要望を受けたこともありました。

―浜田園長は父である幸生先生の魅力をどのようにお感じですか

浜田：正直、私は父に対して怖いだけで、全然魅力を感じていませんでした。家庭を顧みないせいで、ひもじい思いもしました。とにかくお金がありませんでしたので、現理事長のお父様のご厚意で、長屋に無料で住まわせていただいたことも後から聞きました。私はその長屋で保育園ができるまでの7年ほど暮らしたのですが、テレビも無ければ、何にもない。そこで、父と母、妹2人と私の計5人で過ごしていたのですから、私の居場所はなく、通路をはさんだ隣の家で、当時20時から始まるテレビの巨人戦を軒先から見ることが唯一の楽しみでした。

―白樺会の活動の後、幸生先生は「しらかば

濵田 徹

保育園」（現・しらかばこども園）を設立され、社会福祉法人誠心会の歴史もスタートするのですが、保育園に込められた幸生先生の思いはどのようなものだったのでしょうか

濵田：先生は法人設立以前から「みんないっしょの保育園を運営したい」という夢をお持ちでした。今でこそ、様々なハンデを背負ったお子さんを受け入れる場所がありますが、当時は違いました。「こどもをみんないっしょに教育したい」という考えは、僕みたいな一般人には思いもしない発想です。

西村：子どもへの愛情が深かったのだと思います。自分のためではなく、「みんなが喜ぶ場所をつくりたい」と。保育園開所当時は、他に例を見ない独自の取組みのため、全国各地から視察する人が来たそうです。私も先生に会いに保育園を訪れるたびに、ユニークな発想に驚くことが多々ありました。園児はみんな喜んでいたと思います。みんなが喜ぶ笑顔が、とにかく先生は好きでした。

小林：みんないっしょという考えが強かったですね。先生の理念に共感しまして、県を辞めて保育園で働いたのですが、男性の園長は当時珍しかったと思います。先生のことを子どもも保護者も慕っていました。

―身内である浜田園長はお父様の保育園設立をどのように感じていましたか

浜田：私が小学校5年生の時に誠心会が設立され、保育園ができたことはよく覚えています。振り返って父親が唯一家族のためを考えたことだと思うことがあります。それは、誠心会の理事長を1ヶ月だけ母である浜田はる子が務めたことです。父が県に入庁したのは昭和25年5月1日でした。一方で、誠心会が認可されたのは、昭和45年4月1日です。当時、20年勤めると公務員は恩給がつきました。父は県庁を辞めて、すぐに保育園経営を行いたかったのだと思いますが、あと1ヶ月勤めれば恩給がでるため、家族のためを思って、書類上は母を1ヶ月だけ理事長にしたのだと思います。当時の私の生活は調理員の休憩室でもあった2畳を与えられただけでしたので、改善されたわけではありません。ただ、新築で鉄筋コンクリートの建物でしたから、友達が毎日のように珍しがって遊びに来てくれました。今では当り前ですが、トイレで手を洗った後に乾かす装置や、職員の休憩室だった居間がバーのカウンターのようになっていたりと、大津小学校の同級生達からは「これは凄い」とずいぶん注目を集めました。

―保育園の運営を目の当たりにされていかがでしたか

浜田：父の基本理念である「みんないっしょの保育」という発信力や実践力に共感した私の母であるはる子、それから父の妹である茂子さん。そしてその夫である若杉前理事長が、献身的に父に尽くしてくれた姿が焼き付いています。若杉さんは当時神奈川県庁に勤めていて、横浜での仕事が終わると、自分の住まいを通り過ぎて、保育園がある新大津まで来てくれていました。保育園ができる以前から、法人の設立手続きや登記等、様々な事務部門の仕事を手伝っていただいたことも知っています。

―若杉さんは当時のことをどう記憶されていますか

若杉：白樺会で数多くの児童福祉施設を見て回

浜田 和幸

りましたが、軽度の障害児は受け入れてもらえない環境を目にしました。ちょっと言葉が上手く話せないとか、体の動きが少し悪いとか、集団で生活することが苦手ですとか、そういう子どもたちや保護者の方が悲しい目にあっていました。幸生さんが、「ぜひこうした人たちを救いたい」と決断されたことが強く記憶に残っています。国への保育所の設置の認可申請書には、一番最後の欄に「軽度の障害をもつ児童の保育をします」とはっきり書いていまして、その書類は今も残っています。でも、結局は、軽度の児童では済まず、全盲の子ども、盲聾の子どもも入園しましたね。断ることが出来なかったんです。障害児童のための専門家が、ここにはいないといっても、保護者は子どもは子どもの中で、という気持ちが強かったんです。その記録は、幸生先生のレポート（追悼集）のなかにあります。

濵田：本当は制度的に縛りのない無認可施設にしたかったみたいですね。当時「健常児も障害児も一緒に育てるには無認可が一番いい。でも、自分には金がないし、力がないから認可施設で建てる」と話していました。

―誠心会の名前の由来は何ですか

若杉：言葉の通りです。「福祉は制度じゃない。福祉は心なんだ。福祉には柵はないんだよ」いつもそう云っていました。幸生さんが、真心を持って仕事をしようと言われて。どんな困難があっても、この事業は最後までやり通すという強い意志を持っていました。「誠の心を持って、事業を進める」ということで名づけられました。

―皆さん幸生（こうせい）先生とお呼びですが、本名は幸生（ゆきお）さんなんですね

浜田：父の兄は楠生（くすお）ですし、父は幸生（ゆきお）と命名されたのは間違いないのですが、幸生（こうせい）の方が、格があると思ったのではないですかね。

―浜田幸生先生との思い出を振り返っていただきながら、法人設立に込められた思いなどをお聞しましたが、50年も続けてこられた理由は何だったと思いますか

西村：変わり者が多かったのかもしれませんね。

一同：笑い

濵田：たしかに変わり者が多かったのかもしれません。幸生先生の「みんないっしょ」の精神のもと、皆で一致団結していました。

―今では職員が180名に上りますが、保育園ができた当初は何人ほどで運営されていたのですか

小林：私より先輩が3人いましたが、全体で職員は6人くらいだったと思います。

若杉：幸生さんは、「人間よく生きることが大事」だと言っていました。それにしても、信州木曽の役目を終えた森林鉄道の払い下げを受け、隣接地に敷設し、遊び場にしたり、今でも、信州の山奥からどのようにして横須賀まで運んだのか、語り草です。また、山梨県道志村に古民家を移築し、横須賀村白樺郷を開設、横須賀市と道志村との交流を図ったり、屋上や隣接地に動物園を開いたり、これが一保育所のすることかと思いましたね。でも、私は、幸生先生がいろいろなこ

西村 昇

とを行ったけれど、すべてが「福祉」につながっていたと思っています。当時、福祉の一番先端を歩いている方でした。過去の福祉ではなく、これからの福祉はどうあるべきか、を求めていた。だからいろんなことを手掛け、あらゆることのチャンスをつかんで、体験させてくれました。

浜田：若杉さんが今お話になったことは、大事なことでその通りだと思います。ただ、思いつきで財源の裏付けがないのに、次から次にぱっとやって、周りにいた職員が大変な思いをしたことも事実でした。若杉さんのご家族も、うちの家族も反動があったことを忘れてはいけないですし、衝突して辞めていった優秀な職員もいました。創設者を美化するだけではいけないと私は思っています。

―幸生先生が亡くなって18年になりますね。幸生先生にお会いしたことがある職員も少なくなったのではないですか

浜田：そうですね、全体で10名いないかもしれませんね。ちなみにこども園には、一人もいません。私が当時のしらかば保育園の園長に就任してから16年の間に児童福祉施設が二か所でき、しらかば保育園がしらかばこども園となりました。

―幸生先生の意志を引き継ぐ部分と、組織として変わっていく部分が必要なのでしょうか

浜田：時代は昭和から平成、令和と流れ、その間に社会福祉法の大改正もありました。戦前に慈善事業から始まった「社会福祉」は、国から一定の財源がでる聖域でもありました。言葉は悪いですが、国から施されてやれていた側面もあります。また、誠心会もそうですが、全国に何万とある社会福祉法人は創始者が興した事業を子孫というか、一族郎党が運営しているケースが多いです。しかし、私はもはやそういう時代ではないと思っています。50年続いたのは素晴らしいことですが、社会福祉事業は今、制度設計が複雑多岐にわたり、我々も勉強をしないと施策に反映できません。私はこの50年がある意味で、誠心会の大きな区切りを迎えたと思っています。これからはさらに目まぐるしく変化する社会福祉制度の制度設計に対応するよう、時代に乗り遅れることなく、地域で必要とされるニーズを的確に把握して、応えられる事業展開を実践する必要があります。だから、浜田幸生さん云々ということはこの50年で、ひとつの終焉を迎えてよいと思います。息子である私が今の運営に携わっていますが、若い人に道を譲るつもりで、後進を育てることに努めていきたいです。

―理事長はこれからの誠心会について、いかがお考えですか

濵田：幸生さんは亡くなる前に毎日うちに来ていました。また、はる子先生もちょくちょく来られていました。だからこそ、幸生先生のはる子先生への気持ちはよくわかるし、誠心会をここまで大きくされて立派だと思っています。しかし今、和幸園長が言う通り、これからの社会福祉法人経営という面においては、時代に即した運営をしていかなくてはなりません。こども園になったのもそうです。時代時代で求められている形が変わってきています。福祉経営としては、世の中の変化についていかなければいけない。幸生先生は素晴らしい方であり、「みんないっしょ」という思いは受け継ぎながら、世の中にあった形に変えていくことが経営としては大事だと思います。そのためにも、皆で話し合って進めていくことが大事です。そして新しい誠心会を創り上げていければいいと考えます。

小林：誠心会の理念は後世に伝えていってほしいですね。幸生さんは発想がユニークでしたが、今の施設長も柔軟な発想力を持ち、そこに職員がついていくことも大切だと思います。

西村：施設長たちの力で、職員を向上させて欲しいですね。

小林 洋子

―若杉さんはいかがお考えですか

若杉：マカレンコ（アントン・セミョーノヴィチ・マカレンコ）というソビエト連邦（現ロシア）の教育者が書いた本を頂きました。当時、ソ連も大戦で多くの親を失った孤児を抱えていました。幸生先生が22歳で郷里九州から東京に出てきたときに、東京、特に上野界隈は戦災孤児に溢れておりました。この本は、マカレンコがそのような孤児たちをいかに育てるべきかを、自らの実践を通して記したものでした。幸生先生は、上野の孤児たちの集まるところへ毎日通ったそうです。この本は、そのときからの先生のバイブルにしてきた本だそうです。本には、赤線が何回も同じところに引かれて、当時は紙質がよくないために、今にも破れそうでした。そこには「人間は前途に喜びを持たなければこの世を生きることはできない」と記されており、「人間の生活の真の刺激は、明日の喜びである。明日の喜びを与えるようなことをしてほしい」と書かれています。幸生先生はそれを実践してきた人生だったと思います。また、弱いものが犠牲になる暴力がはびこる社会も憂いていました。「みんないっしょ」には誰もがともに明日の喜びを見出す意味が含まれています。ある保護者が述懐をしています。園長の「みんないっしょ」は、子供同士のことだけではないことに気がつきましたよ。「子供はみんなで育てましょう。みんないっしょに育てましょう」というのが、園長の口癖のように思っていましたが、よく考えてみると、何かといえば、行事には親も家族も引っ張り出されていましたね。「みんないっしょ」は、この「しらかば保育園といっしょに、園児だけでなく、職員も親も家族もみんないっしょに育ちましょう」だったんですね。現在の職員の方々が、誠心会の創設時の思いを忘れずに、邁進してくれたら、次の50年もきっと続いていくと思います。

白樺会　昭和32年に横須賀市内で結成された青少年による社会奉仕グループ。誠心会の創設者である浜田幸生が設立。青少年ボランティア団体の先駆けとして注目された。

出席メンバー　プロフィール

若杉　昭平
（わかすぎ　あきひら）

昭和33年春、社会福祉法人誠心会の設立の基になった市内青少年の社会奉仕グループ「白樺会」活動に参加、グループの直接育成者であった浜田幸生先生の福祉理念に基づき奉仕活動を実践支援する。爾来、10年近きに及ぶ活動の結果、軽度の心身障害児の養育保護の疎隔を知り、浜田幸生先生は、グループの応援を得て、当該施設の設置並びに運営するための法人の設立を決意、名称を「誠心会」とし、保育所は「しらかば保育園」と名づけられ、引き続いて日々の事業活動にボランティアとして協力する。浜田幸生先生の逝去後、2年間、当法人の理事長兼障害者通所施設「茜洋舎」の所長に就任、退任後は、法人役員、評議員を拝命、現在に至っている。

濵田　徹
（はまだ　とおる）

中学2年生の時、近所に住む浜田幸生先生が結成した青少年ボランティアグループ「白樺会」に参加。以後、浜田家や誠心会とは家族ぐるみの交流が続いている。自身は30歳の頃、ガラス加工会社を起業。サイパン島で造船業を興すなど海外にも積極的に進出し、経済人としても活躍する。2008年、誠心会理事長に就任。児童養護施設や乳児院の立ち上げなどに奔走した。また世界的な奉仕活動団体のライオンズクラブガバナーも歴任。

浜田　和幸
（はまだ　かずゆき）

浜田幸生先生の長男として1959年に横須賀市坂本町で生まれる。大学卒業後は神奈川県庁に入庁。三浦しらとり園、横須賀児童相談所、高齢者施設課主査、中央児童相談所（児童福祉司）など児童・福祉の道一筋にひた走る。父の逝去を受け2005年誠心会理事・しらかば保育園（現しらかばこども園）園長に就任。2015年には横須賀市で第一号となる幼保連携型認定こども園「しらかばこども園」の認可を受けるなど事業拡大に貢献した。

西村　昇
（にしむら　のぼる）

誠心会の前身である「白樺会」で活動し、現理事長である濵田徹氏を白樺会へ勧誘した。白樺会での積極的な活動から法人設立後も支援した。自身は高校卒業後、自動車の総合訓練校を経て横浜トヨペットに就職。メカニックから営業に移り、その後にトヨタオート神奈川の各営業所長を歴任。2011年4月から乳児院しらかばベビーホームの常勤運転手として3年間勤務し、その後2014年4月から児童養護施設しらかば子どもの家では職員の教育・指導係として勤務した。現在は評議員を務めており、しらかばこども園の農園作業や各施設整備を支援している。

小林　洋子
（こばやし　ようこ）

誠心会の前身である「白樺会」で活動した。横浜女子短期大学卒業後、神奈川県立障がい児施設の保母として勤務。浜田幸生先生の誘いで神奈川県を退職し、しらかば保育園設立当初から保母として勤務した。しらかば保育園歌の「動物からカラス」の詞は、口にお金を咥えて窓をトントンと叩いたカラスの話をした事から園歌となった。1982年、しらかば保育園初の神奈川県保母賞受賞を始め、1996年に厚生大臣賞、1999年に勲六等瑞宝章を受賞した。1997年3月にしらかば保育園を退職後、長年にわたり誠心会の評議員を務めた。

特別座談会追加談話

「ボランティア」

若杉：ボランティアとしての個人や団体が、特別におられたわけではないように思いますが、常々、毎日の保育や作業、また年間の行事などに協力されている方がおられ、その方々のお力に寄ることが大きかったのは確かですね。それは、この誠心会の実践理念としての「みんないっしょ」の思いの中で、お手伝いをされている方々でしたね。

ボランティアというのは、無償奉仕というように解されておりますが、考えますとその行為は、一方的なものではなく、奉仕をする側にも何がしか受け取るものがあったように思います。今で言うインクルーシヴ教育（包括する教育）の先駆けであったと思われる「みんないっしょの保育」、健常児も障害を持つ子どもも一緒に保育するという実践に魅かれて、また幸生先生の、心を共感させるという秘めたる力に思わずお手伝いをしていた、そのような人たちがおられました。

当時の、国が定めていた職員の最低基準の定数は、障害を持つ子どものことは考えられておりませんから、普通の子どもの数から算出された人数でしたね。最低ですから、当初の、この園の職員構成表を見ると、国の定めた保母（現・保育士）の人数の基準は5名ですが、独自の職員配置表を見ると保母7名に児童指導員2名が加わっており計9名になっており4名が基準より多いことになりますね。それにボランティアとして、この配置表には当然のように幾人かが加えられています。無償奉仕だからといって、責任が軽いという意識はなかった、そう思います。しっかりと仕事をしてもらっていましたよ。これも、マカレンコという人の考えを生かしておられたように思います。人間には多くのことを、できるだけ求めよう、それと同時にその人を出来るだけ尊重しよう、という気持ちが、いつもあったと思います。思い余って、口論をしたという現場を見たこともあります。しらかば保育園保護者会の会報にも、そのようなことが記されております。

「この保育園は、お父さんをよく活用するところです。子どもはみんなで育てましょう、みんないっしょに育てましょう。とは、園長の口癖でしたよ」

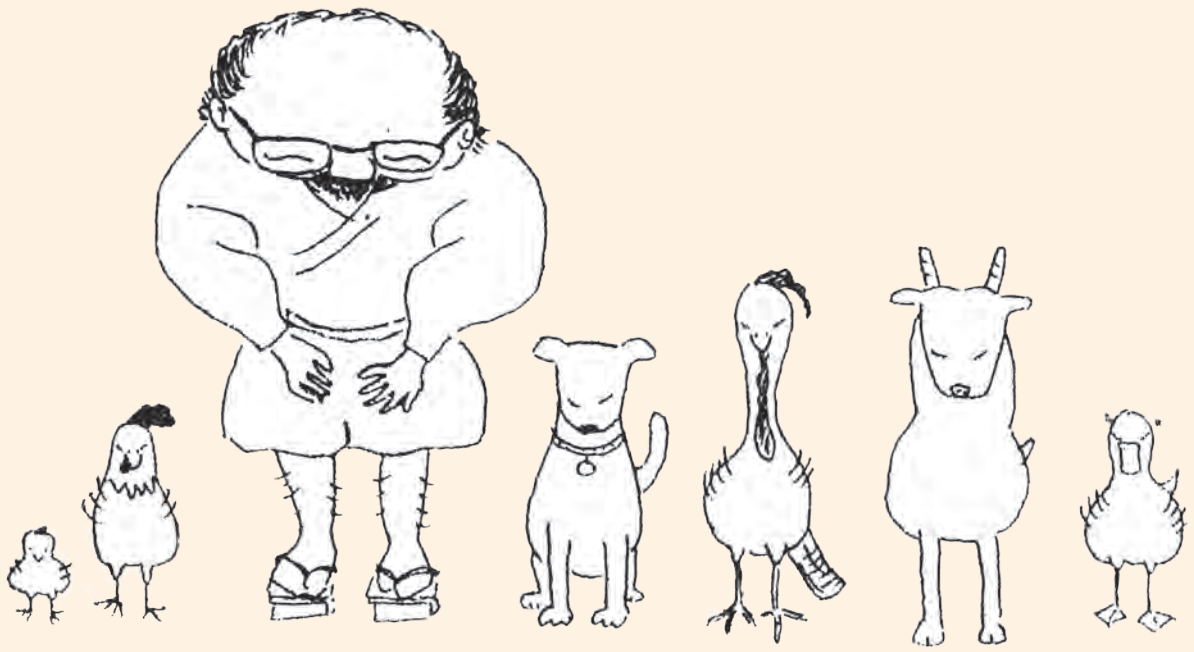
保護者の思い出の一つですが、保護者がボランティアになる、特に父親の出番は多かったのですね。保育は母親一人に任せては駄目だ、と、ボランティアの積極的な活用の中に、父親を初め家族の参加を謳っていますからね。草刈、建物塗装、園庭の整備、夏祭りの屋台作り、店主、動物当番、と出番が多い。祖父母の思いも抱え込んだ保護者会でしたからね。「一日保育」という行事もありましたよ。入園できなかった「在宅障害児」を、毎月一回の「一日保育園」を開いて在園児とのいっしょの保育を試みていますね。その時の給食の準備に、地域の民生協力委員の皆さんがお手伝いに来ていました。随分長く続いた事業でしたね。

こうしたボランティアのなかに、特に目立たない事務的な仕事に、私の職場の友人でもあった富岡正明氏という人を思い出します。私もその一員でもありました。いつも私は、「事務長」と呼ばれていましたね。正規職員には事務職員の定数がありませんから、保育所の事務などは、園長か主任保母でと、行政機関では思っていたのでしょう。法人運営の仕事も、理事会の運営や議事録の整備、保管など、一通りの事務作業がありましたけどね。また、経理も複式簿記でといわれて、私の大学の後輩で商科へ行っていた小山和男氏にも来てもらって、手伝って貰いました。複式簿記など一から勉強しました。簿記から伝票方式に変わったときも、家中に伝票を繰り広げて、家族で作業をいたしました、昨日のようです。調理員には、給食の発注から栄養計算などが求められておりましたが、とても給食の業務をしながら、そのような事務をこなせるなど出来ません。家内も保母をしており

ましたが、給食の栄養計算を家に持ち帰り、夜の夜中までかかって、「四訂栄養分析表」と首っ引きで頑張っていましたね。子どもたちも手伝っておりました。私が、パソコンの電算システムを使って、電算化の工夫をしたのも、この頃でした。

話が輻輳いたしました。富岡氏のことですが、自宅は遠方（東京都葛飾区柴又）でしたが、幸生先生の話し相手に保育園にきては、夜遅くまで原稿などの浄書をされていました。特技がありましたよ。カットです。図案など。下のカット図は、読売教育賞受賞の祝賀会のときのものです。ユーモアと温かみのある図です。今でも使われています。

少し長い話になりましたが、ボランティアの語源は、ラテン語で「志願する」という意味だといわれますが、あくまで自主的な行為なのですね。



昭和49年11月2日、読売教育賞受賞祝賀会が、しらかば保育園で開かれました。
これは、その時のプログラムの最後の頁です。

社会福祉法人誠心会
50周年記念誌

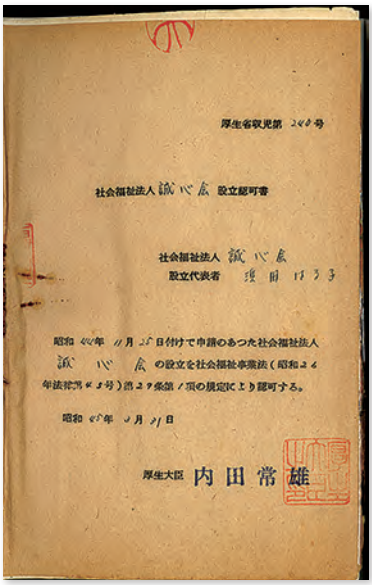
資料編

設立当時の資料

役員（1970年5月1日現在）

理事長	浜田　幸生
理　事	瓜巣　憲三
理　事	海老名 正吾
理　事	加藤田 正美
理　事	五味　百合子
理　事	鷲谷　善教
監　事	鉄谷　長太郎
監　事	浜田　竹雄

設立認可証（S45.3.31）



厚生省収児第 240 号

社会福祉法人 誠心園 設立認可書

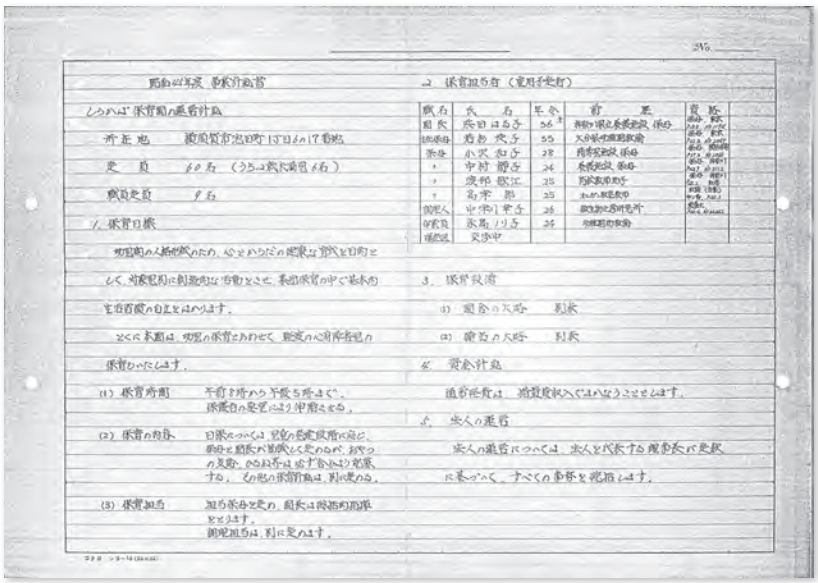
社会福祉法人 誠心園
設立代表者 浜田はるき

昭和 44年 11月 25日付けで申請のあった社会福祉法人 誠心園 の設立を社会福祉事業法（昭和26年法律第45号）第29条第1項の規定により認可する。

昭和 45年 3月 31日

厚生大臣 内田常雄

事業計画書



昭和44年度 事業計画書

1. 保育園の概要計画

所在地　横浜市青葉区田町15番地の17番地

定　員　60名（うち2歳児15名）

職員定員　9名

2. 保育日課

幼児期の人格形成のため、やさしい心と愛情を育成し、明朗で活潑な活動をさせ、集団保育の中で基本的生活習慣の自立をはかります。

とくに本園は、幼児の保育にあわせて、地域の心身障害児の保育をいたします。

(1) 保育時間　午前8時から午後5時まで。保護者の希望により延長する。

(2) 保育の内容　日課については、児童の発達段階に応じ、園長と職員が協議して定めるが、おやつの支給、からだ作りは必ず毎日実施する。その他の保育計画は別に定める。

(3) 保育担当　担当保母と定め、園長は保育担当者とします。
調理担当は別に定めます。

職名	氏名	年令	前歴	資格
園長	浜田はるき	36	神奈川県立養護老人ホーム	保母
主任保母	岩倉 代子	35	大分県竹田児童園	保母
保母	小沢 和子	28	青葉児童園	保母
〃	中村 静子	24	青葉児童園	保母
〃	渡部 恵江	25	明誠学園	保母
〃	高宗 恵	25	〃	保母
調理人	中野 美子	26	横浜市立病院	
用務員	永島 りり子	26	学校給食	
補助員	矢沢中			

3. 保育担当

(1) 園長の不時　園長

(2) 職員の不時　園長

4. 資金計画

運営費は、補助金収入でまかなうことになります。

5. 父人の運営

父人の運営については、父人と代表する理事長が定款に基づいて、すべての事務を取扱います。

服務条件

職員の服務条件　1

1. 職員は分担された仕事の役割りを、相互に尊重し園の特色と指導方針を自覚して、すべて人としての平等の精神で責務を果さなければならない。

2. 児童憲章と福祉理念を当面の児童観として、すべての子どもたちの成長をさまたげる、かべをみきわめるため、理論と実践を統一し、うまずたゆまず学習に励まなければならない。

3. 保護者の子どもに対する処遇を理解し

2.

また子どもを通しての家庭集団を把握し、園の特色と指導方針を理解してもらい、保護者の積極的な組織化をはからなければならない。

4. 保育園の運営とあわせて、その他の事業を企画、主業として、地域社会の組織化をはからなければならない。

保育の基本的日課

時間	課業	備考
07:00	職員集会	打合せ
07:30	園児の登園が始まる	保護者に個別的に面接（連絡その他）自由あそび
09:00	全園児の集い	クラス別あいさつ　おはなし
09:30	クラス別課業	カリキュラムによる
10:20	おかたづけ	
10:30	あそび	カリキュラム
11:30	おかたづけ 昼食準備	あとかたづけ 当番による・手伝・手洗い（野外組の場合　）
12:00	昼食・休憩	うがい・手洗い
14:00		カリキュラム
14:50	おかたづけ	
15:00	おやつ	あとかたづけ
15:30	自由あそび	
16:00	退園	お別れのあいさつ
17:30	全園児退園	
18:00		

保育の基本的日課　（別課）

時間	課業	備考
07:00	職員集会	
09:30	登園が始まる	
10:00	全園児の集い	
10:30	課業	
11:30	課業終り	
12:00	昼食	
14:00		休憩
14:10	あそびの助言	
15:00	おやつ	
	自由あそび	
16:00	お別れ	
16:30	全児退園	
18:00	職員集会・打合せ	

目標

健康を守る

あそびの組織化

規律の導入

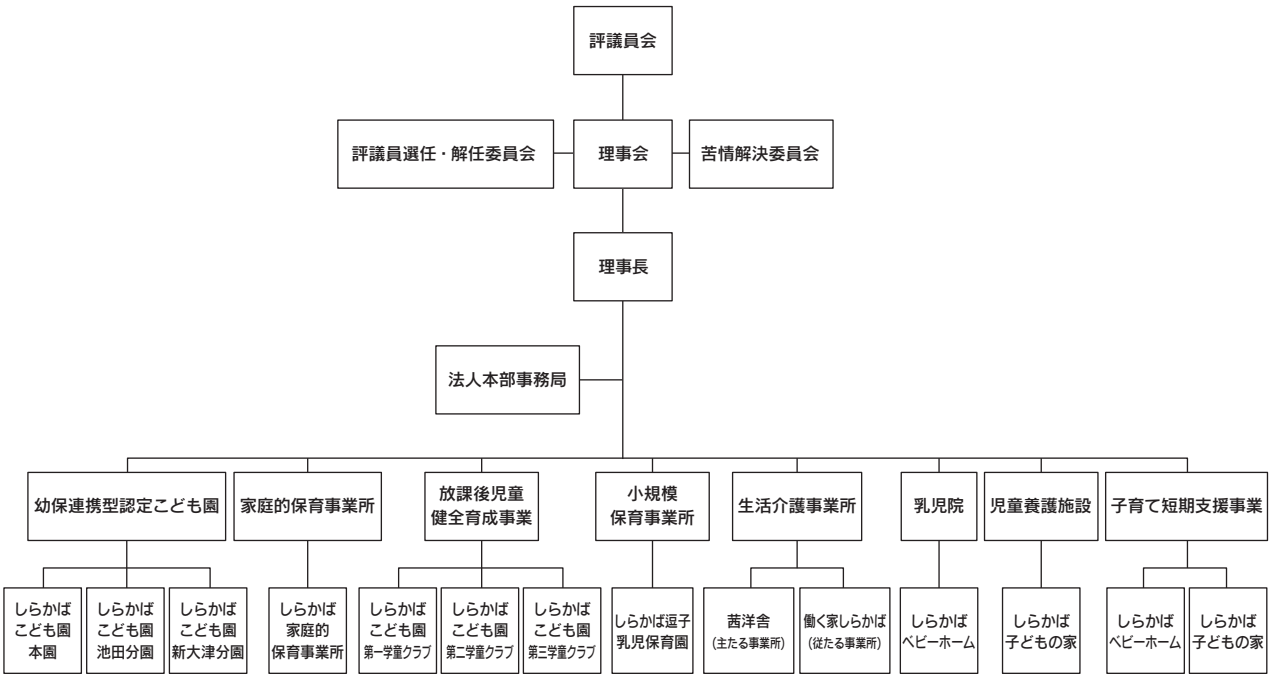
事故の完全防止

現在の資料

役員（2020年4月1日現在）

理事長	濵田　徹
理事	浜田　和幸
理事	髙谷　信好
理事	多田　純夫
理事	芝　太郎
理事	仲嶋　久義
監事	角田　正太郎
監事	小松　信明

組織図（2020年4月1日現在）



貸借対照表内訳表（2020年3月31日現在）

（単位：円）

勘　定　科　目	本　部	しらかば こども園	しらかば ベビーホーム	しらかば 子どもの家	茜洋舎	しらかば 逗子乳児保育園	合　計	内部取引消去	事業区分合計
流動資産	29,870,145	61,662,699	44,488,138	46,474,180	29,344,463	12,849,942	224,689,567		224,689,567
現金預金	29,870,145	16,476,608	32,986,677	40,980,499	9,777,163	10,209,052	140,300,144		140,300,144
事業未収金		4,862,660	8,856,921	4,623,351	19,437,030	342,230	38,122,192		38,122,192
未収金			23,093	102,908			126,001		126,001
未収補助金		39,205,279	2,031,000	539,000		2,298,660	44,073,939		44,073,939
貯蔵品			4,153	6,240			10,393		10,393
商品・製品					105,090		105,090		105,090
立替金		1,050,092					1,050,092		1,050,092
前払金			6,820	168,875			175,695		175,695
前払費用		68,060	579,474	53,307			700,841		700,841
仮払金					25,180		25,180		25,180
固定資産	2,269,706	817,631,468	270,432,558	526,505,300	80,162,990	41,443,302	1,738,445,324		1,738,445,324
基本財産		459,675,828	106,935,790	308,019,010	42,399,401		917,030,029		917,030,029
土地		190,596,400	33,335,000	166,995,855			390,927,255		390,927,255
建物		269,079,428	73,600,790	141,023,155	42,399,401		526,102,774		526,102,774
その他の固定資産	2,269,706	357,955,640	163,496,768	218,486,290	37,763,589	41,443,302	821,415,295		821,415,295
建物		6,838,750	7,078,077	7,078,077	302,570	991,224	22,288,698		22,288,698
構築物		66,545,249	2,426,178	2,474,538	2,117,992	4,575,641	78,139,598		78,139,598
機械及び装置					3,107,699		3,107,699		3,107,699
車輌運搬具		2,271,683	321,907	1,401,253	1,909,006		5,903,849		5,903,849
器具及び備品		15,595,816	2,882,076	2,953,940	886,714	5,642,585	27,961,131		27,961,131
ソフトウェア		75,242		105,362		134,352	314,956		314,956
投資有価証券	269,706						269,706		269,706
退職給付引当資産		14,528,900	11,775,750	11,458,750	21,235,350	1,099,500	60,098,250		60,098,250
人件費積立資産		154,000,000	50,000,000	70,000,000		26,000,000	300,000,000		300,000,000
修繕費積立資産			39,000,000	62,000,000	8,204,258		109,204,258		109,204,258
施設整備積立資産			50,000,000	61,000,000			111,000,000		111,000,000
保育所施設・設備整備積立資産		98,100,000				3,000,000	101,100,000		101,100,000
長期前払費用			12,780	14,370			27,150		27,150
出資金	2,000,000						2,000,000		2,000,000
資産の部合計	32,139,851	879,294,167	314,920,696	572,979,480	109,507,453	54,293,244	1,963,134,891		1,963,134,891
流動負債	73,653	41,444,250	29,671,854	29,798,523	13,405,905	3,704,373	118,098,558		118,098,558
事業未払金	5,485	6,019,013	4,870,050	2,581,992	3,146,310	276,267	16,899,117		16,899,117
その他の未払金			1,161,740				1,161,740		1,161,740
1年以内返済予定設備資金借入金		9,732,000	5,966,000	9,430,000			25,128,000		25,128,000
未払費用	60,000	1,682,505	996,420	1,861,389		357,353	4,957,667		4,957,667
預り金	8,168	528,546		185,691			722,405		722,405
職員預り金		3,391,186	1,382,502	1,454,451	1,259,595	280,753	7,768,487		7,768,487
賞与引当金		20,091,000	15,295,142	14,285,000	9,000,000	2,790,000	61,461,142		61,461,142
固定負債		137,800,900	64,291,083	103,185,417	21,235,350	1,099,500	327,612,250		327,612,250
設備資金借入金		123,272,000	52,515,333	91,726,667			267,514,000		267,514,000
退職給付引当金		14,528,900	11,775,750	11,458,750	21,235,350	1,099,500	60,098,250		60,098,250
負債の部合計	73,653	179,245,150	93,962,937	132,983,940	34,641,255	4,803,873	445,710,808		445,710,808
基本金	67,798	30,288,959			38,794,158		69,150,915		69,150,915
基本金	67,798	30,288,959			38,794,158		69,150,915		69,150,915
国庫補助金等特別積立金		145,068,481	58,342,277	108,704,980	25,184,300	3,516,855	340,816,893		340,816,893
国庫補助金等特別積立金		145,068,481	58,342,277	108,704,980	25,184,300	3,516,855	340,816,893		340,816,893
その他の積立金		252,100,000	139,000,000	193,000,000	8,204,258	29,000,000	621,304,258		621,304,258
人件費積立金		154,000,000	50,000,000	70,000,000		26,000,000	300,000,000		300,000,000
修繕費積立金			39,000,000	62,000,000	8,204,258		109,204,258		109,204,258
施設整備等積立金			50,000,000	61,000,000			111,000,000		111,000,000
保育所施設・設備整備積立金		98,100,000				3,000,000	101,100,000		101,100,000
次期繰越活動増減差額	31,998,400	272,591,577	23,615,482	138,290,560	2,683,482	16,972,516	486,152,017		486,152,017
次期繰越活動増減差額	31,998,400	272,591,577	23,615,482	138,290,560	2,683,482	16,972,516	486,152,017		486,152,017
（うち当期活動増減差額）	516,937	65,348,653	25,744,553	36,605,242	(4,430,528)	15,886,092	139,670,949		139,670,949
純資産の部合計	32,066,198	700,049,017	220,957,759	439,995,540	74,866,198	49,489,371	1,517,424,083		1,517,424,083
負債及び純資産の部合計	32,139,851	879,294,167	314,920,696	572,979,480	109,507,453	54,293,244	1,963,134,891		1,963,134,891

第三号第三様式（第二十七条第四項関係）

しらかば子どもの家 しらかばベビーホーム 後援会

一人でも多くの子どもたちの未来に希望の灯をともすために、後援会を平成23年6月に発足させました。

後援会は

1 不安なく施設を旅立てるように、在園中の学習、資格取得などの支援

2 施設を旅立つときの経済的な支援

3 大学等へ進学を支援する奨学金の支給

4 困難に直面した時に帰れる場所の確保

等を行うために、会員を募集し会費（ご寄付）で運営をしています。また、会費の一部を子どもの進学祝い、施設の年中行事にも支援しています。

後援会役員

役員名	氏　名	会社名
会　　長	益子 健一	（株式会社三春商会）
副会長	井出 城二郎	（株式会社井出運輸商事）
会　　計	村山 幸壽	（株式会社むらやま）
会計監査	鶴若 行夫	（株式会社鶴若防災）
	弓削 元	（有限会社ワカフジベーカリー）
幹　　事	池口 大介	（美豊ホンダ販売株式会社）
	小澤 長幸	（日本水産観光株式会社）
	加藤 英一	（有限会社英恵）
	佐藤 仁	（株式会社佐藤船舶工業）
	鈴木 宏之	（元しらかばベビーホーム）
	高橋 拓海	（株式会社太八商事）
	千葉 拓未	（株式会社ティー・エム・シー）
	畠山 貴子	（有限会社朋友自動車商会）
	望月 真澄	（湘南製餡株式会社）
	森　恵理子	（大同生命保険株式会社）
	渡辺 幸範	（有限会社渡辺設計）
顧　　問	濵田 徹	（社会福祉法人誠心会）

2021年2月1日現在

いつも支えてくださっている
地域の関係機関の皆様

公益社団法人　横須賀法人会　青年部会（加藤 隆史 部会長）

2012年から社会貢献委員の方が窓口となり、
奉仕活動の一環として施設訪問（慰問）イベント、時には外出行事を企画、提供していただいています。
子どもたちの幅広い活動と社会体験につながり、さらに毎年のイベント開催の中で顔なじみとなり、女性部会の方も含めた会員の方々との交流体験を重ねています。

2020年度
- 医療現場に贈る「飾り旗」作成　市内3病院のスタッフにメッセージを届けました。

2019年度
- バーベキューとビンゴ大会　●税金を学ぼう（ホットドッグ会社と税金）

2018年度
- バーベキューイベント　●キッザニア 職業模擬体験　●お仕事体験イベント 法人会会員職種を体験

長瀬町内会（真下 厚 会長）「しらかば園設立10周年に寄せて」

社会福祉法人誠心会設立50周年、しらかば園（しらかばベビーホーム、しらかば子どもの家）設立10周年おめでとうございます。

私がしらかば園の行事に参加させて頂いたのは、町内会長に指名された平成25年からになります。4月に行われる卒業・入学お祝い会、10月のあしたば祭には毎回参加させて頂いています。また、日常ではベビーホームの幼児でしょうか、私の家の前を乳母車に乗った幼児と保育士の先生方に手を引かれた園児が、にぎやかに散歩している姿を良く見かけます。桜の花が咲くころ、「公園で子供たちを遊ばせてもいいですか」と聞かれたので、「どうぞ遠慮しないで利用して下さい」と返答したことを思い出します。

見守り隊でも園児たちの元気で溌剌とした登校姿に接し、その都度、明るい環境である事を実感しています。

コロナ禍で大変の中、陽気で明るいしらかば園の発展を祈念致します。

しらかば子どもの家施設長から感謝の言葉　「地域で育つ」

長瀬の二施設は、子どもたちにとって大切な生活の場であり、地域の皆さんとの何気ない会話や交流、海岸、林や公園といった自然や環境、そんな中での様々な体験を含めて多くの貴重な経験をさせてもらっています。それらは子どもたちが成長して将来社会で自立していくために重要な目に見えない財産です。

ボランティア活動としてのご協力もいただいておりますが、近隣の方々とのつながりとしては、トンネルを超えた先にあるシティマリーナヴェラシスさんでは施設開設当時からクルージング体験やBBQ交流のご提供をいただいております。有名な海洋冒険家の方からの貴重なお話しも何度か聴かせていただきました。

そして、何といっても地元の長瀬町内の方々とは特に関係が多様です。ベビーホームのお散歩コース、小中学生の通学路、多彩な町内行事、学校行事との連携など年間活動の中で多くの関わりがあります。毎日の通学路では「見守り隊」の方々がその名のごとく安全を見守ってくださいます。町内行事はとても楽しみで、児童部の一員として参加できています。

長瀬町内会は日ごろから熱心に活動に取り組まれており、かつ開放的です。新しい住宅地やバス営業所の移転なども進んでこれからの変化発展も期待されますが、縁あってこの地に開設できて、今後も関係を持てることが何よりありがたく思います。

しらかば子どもの家
施設長 仲嶋 久義

メディア掲載

献身の精神 人と人つなぐ

人物風土記

●「しらかばベビーホーム・子どもの家」を運営する社会福祉法人誠心会の理事長

濵田（はまだ） 徹さん

大津町在住　68歳

題字は
吉田雄人市長

○…兄弟の中で一番気が優しい。ついつい人の面倒を見てしまうその性格は、小さいころから変わらない。近所に住んでいた児童相談所職員・浜田幸生さんの呼びかけに応え、中高生10人と「しらかば会」を結成したのは、中学二年のとき。孤児院や老人ホームで、演劇や指人形を披露してまわった。そこで感じた人とふれあうことの楽しさ。いつしか仲間もどんどん増えていった。幸生さんとは、家族同然のつきあいになった。

○…「先生」と仰ぐ幸生さんが誠心会を設立し、〝しらかば〟という名の保育園をはじめたのと同じ頃、30歳で起業した。最初はガラス加工会社だったが、自ら長所と認める決断力で、新規事業にもどんどん挑戦した。ついには日本を飛び出し、サイパン島で造船業を開始。10年間心血を注いだ事業は、観光地サイパンの発展を影で支えた。「人がよすぎて失敗したこともあります」と恥ずかしそうに語るが、その人柄ゆえ、人を惹きつける。いつも誰かが力を貸してくれる。

○…一緒に児童養護施設を立ち上げたい―。幸生さんの遺志を継いだ息子・和幸さんの申し出を、いつもの調子で引き受けたのは3年前。誠心会の理事長に就任すると、人脈を生かして土地や人材の確保にかけずりまわった。そして今月1日、晴れて開所を迎えた。「できる限り、ふつうの子と同じ環境で子どもたちを育てたいんです」。明るい居住スペースや広い個室に、そんな思いが滲み出る。

○…「先生への恩返しと思って」ここまで駆け抜けてきたが、いずれは和幸さんにすべてを任せるつもりだという。ただその前に、果たしたい夢がある。子どもたちが本当の家庭のように暮らせる、もっと小さな施設を建てることだ。「ここを巣立っても、子どもたちがいつでも帰ってこれるところにしていかなくちゃね」。輝きに満ちた目は、〝しらかば会の徹少年〟を彷彿とさせる。夢の実現はまだ、始まったばかりだ。

タウンニュース横須賀版
2011年4月8日号

しらかば保育園

「こども園」へ移行表明

今年4月の開設めざす

育児支援の拡充や待機児童の解消などを目的に、今年4月から施行される「子ども・子育て支援新制度」。幼稚園と保育所の特長を持つ「認定こども園」の設置が進む中、しらかば保育園（池田町）が「認定こども園」への移行の意思を表明した。現在、太田和保育園も移行に向けた準備を進めるほか、私立幼稚園1園が協議を続けている。

「子ども・子育て支援新制度」の目的は、「質の高い幼児期の学校教育・保育の総合的な提供」「保育の量的拡大・確保」「地域の子ども・子育て支援の充実」の三本柱。待機児童や少子化など子育てをめぐる環境改善のため、今年4月から施行される。その具体的な取組みの1つに、幼稚園と保育園の機能を合わせ持つ施設「認定こども園」が挙げられ、自治体では普及拡大をめざしている。

横須賀市では今年度から認定こども園への移行支援策として、11時間以上開園して長時間預かり保育を行う園に運営費用を助成。これにより当初、私立幼稚園4園が名乗りを上げていた。しかし、今年4月に本格実施を迎えるにも関わらず、制度の周知不足や国の補助基準・指針の不透明さなどが浮き彫りとなり、移行を見送る園が相次いでいる。

市は新制度施行に伴い、子ども・子育て支援事業計画「（仮称）横須賀子ども未来プラン」案を策定。今月27日、審議会での議論を経て、市長へ答申した。

保護者のニーズに対応

池田町にある「しらかば保育園」は、幼稚園と保育園機能を一元化した施設「幼保連携型認定こども園」への移行を表明。今年4月の開設をめざしている。「以前から保護者の幼児教育に対するニーズの高まりを感じていた」と導入を検討。予定されていた園舎の建て替えが契機となり、移行の意思を固めた。

同園では就労の有無などに関わらず入園できるほか、農業体験を通した食育、専任保育士や講師による図工・体育教室も展開。移行後はこども園として、蓄積したノウハウを活かし、独自カリキュラムで幼児教育を行うとしている。

「小1の壁」も解消

さらに小学1年から6年生までを対象とする放課後児童クラブ（学童保育）も新設予定。「これで0歳から12歳まで、切れ目のない一貫した子育てが可能になる」と浜田和幸園長は話す。保育所を卒園し、小学生になった途端預け先がなくなる「小1の壁」問題の解消も期待される。このほかにも、園に隣接する一軒家での小規模保育を構想。2歳児定員5人に対し、2人の保育教諭で手厚い保育を実践するなど、実現すれば新制度のもとでのモデルケースとなりそうだ。

市内には約80の幼稚園・保育所がある。年間の出生数は3千人を割り、少子化が進むなか、新たな園児の獲得競争はこれまで以上に激しくなる。保護者に選ばれるための特色づくりは必要不可欠。しらかば保育園以外にも太田和保育園と私立幼稚園1園が市と協議を続けているほか、多数の園が関心を示している。

新制度で増える教育・保育の場

幼稚園（3～5歳）
小学校以降の教育の基礎をつくるための教育を行う学校施設

保育所（0～5歳）
就労などのため家庭で保育のできない保護者に代わって「保育」を行う施設

認定こども園（0～5歳）
教育と保育を一体的に行う施設

地域型保育（0～2歳）
施設（原則20人以上）より少人数の単位で、0-2歳の子どもを預かる事業

子ども・子育て支援新制度「なるほどBOOK」より抜粋

タウンニュース横須賀版
2015年1月30日号

虐待児童の受け皿に

乳児院、児童養護施設一体型で4月開設

〈完成予想図〉

1階に乳児院、2・3階が児童養護施設となる

市内長瀬に今春、乳児院「しらかばベビーホーム」と児童養護施設「しらかば子どもの家」が開設される。市内で乳児院の設置は初めて、児童養護施設は2カ所目となる。定員はそれぞれ25人と40人。経済的な理由や家庭の事情などで親が育てられない子どもや、虐待を受けた子どもを預かり養育する。

設置・運営を担うのは社会福祉法人誠心会（濵田徹理事長）。市内で保育園や障がい者の通所施設を運営するなどこれまで様々な福祉サービスを展開してきた。

平成18年に横須賀市児童相談所が新設されてから、市では子育て支援策の柱として「乳児院・児童養護施設等の一体的・効率的な運営が可能な施設整備が重要」と考え、開設に向けて同法人と準備を進めてきた。

敷地面積は約1,750平方メートル。施設は3階建てで、延べ床面積は1,525平方メートルとなる。建物内に両施設の機能を備えるほか、子育て短期支援事業で虐待の予防や一時避難所としてショートステイ（事前登録制・定員4人）を設置する。

「ベビーホーム」では親と暮らせない0歳から2歳児までの乳幼児を預かるのに対し、「子どもの家」ではおおむね2歳から18歳までを対象とする。どちらも保護者が健康的・経済的な問題を抱えているか、虐待を受けているなどの状況にあり、児童相談所が施設で養護する必要があると判断した子どもを受け入れる。

“越境”から市内養育へ

横須賀市内では乳児院の設置は同ホームが初めて。児童養護施設は小矢部にある「春光学園」に加えて2カ所目となる。同学園では現在2歳から18歳の子ども85人の定員に対し、市外の児童も受け入れるため、市内からの児童は44人でほぼ空きがない状態が続いていた。このため、児童相談所が施設での養護が必要と判断した児童でも、これまでは市外への“越境入所”を余儀なくされるケースが少なくなかった。乳幼児に関しても同様だった。

新設の「こどもの家」では従来、児童養護施設では中高生のプライバシー確保が難しかった問題に、定員の半分（20人分）に個室を用意、6LDKのユニットを体制で対応するなど、より家庭環境に近い形での養育を目指すという。

虐待児童の保護に期待

横須賀市児童相談所が平成21年度に受けた児童虐待に関する相談件数は274件。人口10万人あたりの件数で換算した場合、横須賀市は全国平均の2倍の数字になる。そのうち、緊急避難として「一時保護」措置となったのは136件。

今回の両施設の開設によって、保護者の病気や離別、虐待などにより家庭で養育を受けられない子どもたちを保護する受け皿が市内に広がる格好となる。

市担当者は「継続して同じ地域や保護者の元で暮らせる環境ができやすくなったことで、子どもにとってよりストレスが少ない形での養育が可能になると期待している」と話した。

タウンニュース横須賀版
2011年1月21日号

社会福祉法人誠心会 50周年記念誌

みんないっしょ

発　行　2021年3月1日　　発行者　社会福祉法人誠心会

〒239-0806　神奈川県横須賀市池田町1-22-12
TEL : 046-834-0690　FAX : 046-834-1706

編集・デザイン　株式会社タウンニュース社

社会福祉法人誠心会